

Title	ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代,あるいは諦念の人々』初稿(1821年): 翻訳の試みと覚書(5)
Sub Title	J. W. Goethe : Wilhelm Meisters Wanderjahre oder Die Entsagenden (I. Fassung). Übersetzung und Anmerkungen (5)
Author	山本, 賀代(Yamamoto, Kayo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.62 (2022.) ,p.85- 136
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	境一三教授退職記念号 = Sonderheft für Prof. Kazumi Sakai
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20220331-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ
『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代、
あるいは諦念の人々』 初稿（1821年）
—— 翻訳の試みと覚書（5） ——

山本賀代

試訳¹⁾

第10章²⁾

巡礼の父子は指示されたとおりに道を取り、無事に地区の境界にたどりついた。ここで彼らはいろいろと風変わりなことを見聞することになる。

1) 翻訳の底本には Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche*. 40 Bde. Hg. von Hendrik Birus u.a. Frankfurt am Main 1987–2013 [=FA] の Bd. 10: *Wilhelm Meisters Wanderjahre*. Hg. von Gerhard Neumann u. Hans-Georg Dewitz. Frankfurt am Main 1989 [=FA10] を使用し、本書の詳細な解説・注釈とともに Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens*. Hg. von Karl Richter in Zusammenarbeit mit Herbert G. Göpfert u.a. München 1985–1998 [=MA] の Bd. 17: *Wilhelm Meisters Wanderjahre. Maximen und Reflexionen*. Hg. von Gonthier-Louis Fink, Gerhart Baumann und Johannes John. München 1991 [=MA17] を常に参照した。今回訳出した範囲は FA10, S. 84–128。脚注には、主として2稿との異同（明確な変更箇所はアンダーラインで示す）や、執筆・改作過程に関する情報を記した。ただし引用符の有無、コンマ・コロン等の記号の変動や正書法の修正・変更については省略した。以下、作品名は『遍歴時代』と略す。

2) 2稿では第2巻第1章。FA10, S. 414。

敷地に足を踏みいれてまず目についたのは、とても肥沃な土地であった。なだらかな丘陵の斜面は農耕に、もう少し小高い山の上は羊の飼育に、そして谷間に広がる平地は牧畜に最適な環境だった。収穫直前の季節だったので、すべてが豊かに実っていた。だが、やがて奇妙に思われたことには、恵まれた収穫に向けての準備や、さらには楽しい収穫祭の手配に勤しんでいるのは、大人の女性でも男性でもなく、すべてが青少年たちだった。父子は何人かに学園長のことを尋ねたが、誰もその居場所を教えることはできなかった。手紙の宛名は学園長あるいは三人会へとになっていた。三人会についても少年たちには見当がつかなかったが、質問者たちはちょうど馬に乗ろうとしていた一人の監督者に聞いてみるように言われた。父子は彼らの目的をうちあげた。フェーリクスの率直さがこの男の気に入ったようで、三人は一緒に馬で街道を進みはじめた。

すでにヴィルヘルムは、子どもたちの服装が型も色もさまざまのために、全体の様子に奇異な外観を与えていることに気づいていた。この点について同伴の男に質問しようとしたちょうどそのとき、彼はさらに不思議な光景を目撃した。すべての子どもたちが、たとえ忙しくしていても仕事をやめ、特別な、しかもさまざまな身ぶりをしながら、馬に乗って通りすぎる彼らのほうを向いたのである。これが目上の者に対してなされたことは容易に推測できた。最年少の子どもたちは胸の上で腕を十字に組み、朗らかに天を仰いだ。中間の年齢の者たちは腕を背中にまわし、微笑みながら大地を見つめた。年上の子どもたちはまっすぐに堂々と直立し、腕はおろしたまま、頭を右側に向けて、一列に整列していた。一方、前者の子どもたちは、彼らのいた場所にそれぞれとどまっていた。

その後、三人が立ちどまり馬を降りたところでも、ちょうど数人の子どもたちがさまざまなやり方で整列し、監督者の点検を受けたので、ヴィルヘルムはこの身ぶりの意味を尋ねた。フェーリクスが会話に割りこみ、元氣よく言った、「ぼくはどんなポーズをとればいいの？」監督者は応えた、「とりあえず、まずは腕を胸の上にかかげ、真面目にそして朗らかに上を

見あげてごらん。視線をそらしてはだめだよ。」フェーリクスはしたがったが、まもなく叫んだ、「これはあまり面白くないな、上には何も見えないんだもの。長く続けるの？ いや、いいぞ！」彼は嬉しそうに声をあげた、「数羽の青鷹が西から東のほうへ飛んでいくよ。これはきっとよい前兆だね？」「君の考え方しだい、君の行動しだいでよ」と監督者は返した。「あの子たちが交じりあっているように、君も仲間に入っておいで。」彼が合図をすると、子どもたちは姿勢をくずし元の仕事や遊びに戻っていった。

「よろしければ、当地で私を驚かせている事がらについてご説明をいただけませんか？」とヴィルヘルムは言った、「あの身ぶりや姿勢があなたを迎えるための挨拶だろうとは思いますが。」

「まったくそのとおりです」と監督者は応えた、「彼らの挨拶は、少年たちのひとりひとりが教養のどの段階にいるのかを直ちに示しているのです。」

「お許しただけなら」とヴィルヘルムは続けた、「序列の意味を教えてくださいたいのですが。というのも、そのようなものがあることは理解できますので。」「それは私よりも高位の者にふさわしいことです」、監督者は返した。「ただ私が自信をもって言えるのは、これが空虚なしかめっ面ではないということです。むしろ子どもたちには、最高とは言わないまでも、主要な意味がわかりやすく伝達されるのです。しかし同時に、この子に伝えるのがよいとみなして教えられた事がらについては、各々が心のなかで秘かに温めておくことが要求されます。知らない人ともお互いのあいだでも、そのことについておしゃべりすることは許されません。こうして教えはいかようにも変容します。加えて、秘めごとというのは非常に大きな利点もっています。大切なことをいつでもすぐに伝えてしまうと、それはたいしたことではないと思われれます。ある種の秘密に対しては、たとえ公然のものであっても、覆い隠し沈黙することで敬意を表さねばなりません。これが羞恥心や礼儀作法にもよい効果をもたらすのです。」「おっしゃることはよくわかります」とヴィルヘルムは応じた、「身体的な事が

らにおいて非常に必要なことを、どうして精神的な面に応用してはならないことがありますか。ひょっとするとあなたは別の方面でも私の好奇心を満たしてくださいませでしょう。服装の型や色がばらばらだったことに気づきました。すべての色ではありませんが、いくつかの色は非常に明るいものから暗いものまで、あらゆるグラデーションを見ることができますね。しかし私の見たところ、それは年齢や功績の段階を示しているわけではなさそうです。非常に大きな少年と小さな少年が混ざっていても、服装の型や色が同じこともあります。同じ身ぶりをしているのに、服装が一致していない子どもたちもいます。」「この点についても」と同伴者は返した、「私にはこれ以上言うことができません。しかし私の思い違いでなければ、あなたが私たちのところを去られるときには、すべてはあなたのお望みどおりに解きあかされていることでしょう。」

彼らは見つけたと思われた学園長のあとを追ったが、新参者にはどうも気になることがあった。地区の内部に入れば入るほど、美しい歌声がますます響いてくるのであった。子どもたちは何を始めるにも、どんな仕事をしている場合にも、いつも歌っていた。しかも歌はそれぞれの仕事に特別にぴったり合っていて、同じ仕事の場合には、どこでも同じ歌が歌われているようだった。何人かの子どもが集まれば、互いにハーモニーを付けあって合唱する。夕方には踊りだす者も現れ、その足どりはコーラスによって盛り上げられ、制御された。フェーリクスも馬上から一緒に声を合わせたが、なかなか悪くなかった。あたりをにぎわすこの娯楽をヴィルヘルムも喜んだ。

「きっと」、彼は監督者に言った、「このような教育に細心の注意がはらわれているのでしょうか。そうでなければ、こうした熟練が広く行きわたり、これほど完璧に身につくことは不可能でしょう。」「そのとおりです」と相手は応じた、「ここでは歌が教養の第一段階なのです。他のものはすべて歌に続きます。歌がすべてを仲介するのです。私たちのところでは、どんなに単純な遊びも歌によって活気づけられ、簡単な教えも歌を通じて

心に刻まれます。それどころか信念や道徳について伝えようとする場合にも、歌うという手段を通して伝達されるのです。自立したさまざまな目的に達するためのその他の利点も、すぐに緊密に関連してきます。私たちは子どもたちが発声する音を記号で板書させ、次にこれらの記号から喉を使って音を再現させ、さらにその音に歌詞を組みあわせることを訓練させます。すると子どもたちは手と耳と目を同時に使うことになり、考える以上に速く、正しく美しい文字を綴るようになります。しかもこれらすべては、最終的には純粋な尺度と正確に規定された数値にしたがって実行され、模倣されなければならないのですから、子どもたちは測量術や算術の高い価値を他のどのような方法よりもすばやく理解するのです。それゆえに私たちは、あらゆる可能性のなかから音楽を教育の根幹に選びました。音楽からは同じように開かれた道が四方八方に広がっているのです。」

ヴィルヘルムはさらに教えてもらおうと、器楽音楽が聞こえてこないのが不思議であると隠さずに伝えた。「器楽音楽がここで軽視されているわけではありません」と男は返した、「しかしある特別な地区で、非常に美しい山あいの谷に囲まれたところで練習されているのです。さらに、さまざまな楽器がそれぞれ離れた場所で教えられるように配慮されています。とりわけ調子はずれの音を出す初心者には、他の人を絶望させないように人里離れた庵に追いやられます。あなただって白状されると思いますが、上等な市民社会では、始めたばかりの隣人のフルートやヴァイオリンの音に耐えること以上に私たちを悩ませる苦痛はありませんからね。」

「私たちの初心者たちは、人をわずらわすまいという褒められるべき心がけから、多かれ少なかれ一定の期間、荒野に旅立っていくのです。そして孤独に、人の住む世界に近づくことが許されるような力を得ようと努力するのです。誰にでも世間に近づく試みがときどき許可されますが、失敗することはめったにありませんね。その理由は、ここでも別の施設でも同様ですが、私たちが羞恥心や謙虚な心を抱き養うことをよしとしているからなのです。あなたの子息が声に恵まれているのは大変に喜ばしいことで

す。それだけその他の面に配慮することが容易になりますから。」

三人はフェーリクスが滞在する場所に到着した。正式な手続きをするまで、彼はまず環境に合うかどうかここで試してみることになったのである。すでに遠くから朗らかな歌声が聞こえてきた。今度の歌は少年たちが自由時間を楽しむ遊びだった。それは大きな円をつくった各パートが、指揮者³⁾の合図にしたがって楽しく朗らかに力強くそれぞれの声部を響かせる一般的な合唱であった。しかし指揮者はときおり合図を送って合唱を止めさせ、参加者の誰かを指揮棒で触れて、鳴りやんでいく音と浮かびあがる感覚に合わせて巧みに独唱するよう要求し、歌っている仲間たちを驚かせるのであった。すでにほとんどの少年たちが上手に課題をこなしていた。芸の披露に失敗する者もあったが、特に笑い者になることもなく、罰ゲームを楽しんでいた。フェーリクスはまだ子どもだったから、すぐに彼らの仲間に入り、どうにかこうにかその場を切り抜けた。すると彼にあの第一の挨拶が捧げられた。フェーリクスはすぐに両手を胸にかかげて、上を見あげた。しかしそのおどけた表情からは、彼がまだそこに隠された意味を理解していないことは明らかだった。

快適な場所、優しい歓迎、楽しい遊び仲間、すべてが気に入ったので、少年は父親が旅立つのを見てもそれほど悲しくはなかった。むしろ連れられていく馬を見送るほうがつらいくらいだったが、聞きわけよくした。今の地域では馬を飼うことは許されないが、いつか、同じではないにしても似たような手入れされた元気な馬を飼えるだろうと約束してもらったからである。

学園長がつかまらないので、監督者は言った、「私はそろそろ仕事に戻るため、お別れしなければなりません。そこで、あなたを私たちの聖物を管理している三人会のところにお連れしようと思います。あなたの手紙は彼ら宛てでもありますし、彼らは三人で学園長の代行をしています。ヴィルヘルムは聖物についてあらかじめ話を聞いておきたかったが、監督

3) 初稿では Aufseher, 2 稿では Regelnder に変更 (Vgl. FA 10, S. 418)。

者は言った、「ご子息を私たちに委ねられたあなたの信頼のお返しに、三人会が叡智と公正さにしたがって、もっとも大切なことをあなたに解きあかすことでしょう。目に見える敬意の対象を私は聖物と呼んだのですが、それらは他のものと混ざったりかき乱されたりしないように、ある特別な地区にしまいこまれています。一年のある決まった時期にだけ、生徒たちは各自の教養の段階に応じてそのなかに足を踏み入れることが許され、聖物について歴史的にそして感覚的に教えを受けるのです。というのも、十分な印象をもち帰れば、自分たちの義務を果たす際にしばらくはその印象を思いかえすことができますから。」

今やヴィルヘルムは高い壁に囲まれた谷間の森の入り口に立っていた。ある合図にしたがって小さな門が開き、真面目な面もちの堂々とした男が私たちの友を迎えた。ヴィルヘルムは美しく若葉が芽吹く大きな空間に立っていた。さまざまな種類の木々や灌木の蔭に覆われ、威厳のある壁も立派な建物も、このぎっしり生えた背の高い自然の植林を通しては確認できないほどであった。次々にやってきた三人会から親しみのこもった歓迎を受け、やがて各自が自分の意見を述べあう会話に発展した。その内容を短くまとめておく。

「ご子息を託していただくのですから」と彼らは言った、「私たちのやり方をもっと深くご理解いただく義務が私たちにはございます。ご覧になった外的なもので、すぐには理解しがたいものもございましょう。それについて特に何か説明を希望されるものがありますか？」

「行儀よく、しかし独特な身ぶりで行なわれる挨拶に目がとまりましたが、その意味について教えていただけるのでしょうか。こちらでは外的なことは内的なことに関連づいているに違いありませんし、またその逆も然りです。どうぞこの関係について解きあかしてください。」

「高貴な生まれの健康な子どもたちは」と三人会は応えた、「多くを身に備えています。子どもたちはみなそれぞれ、生涯で必要となるものをあらかじめ自然から与えられています。これらを発展させることが私たちの務

めですが、おのずからよりよく発展することも少なくありません。しかし、誰も生まれながらにはもっていないものがひとつあります。しかも人間がどのような方面でも一人の人間であるためには、すべてがそれにかかっているのです。ご自身でそれを言いあてることができるなら、どうぞおっしゃってください。」ヴィルヘルムはしばらく考えたが、頭をふった。

かなり躊躇したあと、彼らは叫んだ、「畏敬です！」ヴィルヘルムははっとした。「畏敬です！」とくり返された、「これは誰にでも欠けているのです、おそらくはあなたご自身にも！」

「あなたをご覧になった三通りの身ぶりで、私たちは三つの畏敬を伝えています。これらは合流してひとつの全体を形づくるとき、初めてその最高の力と効果を発揮するのです。一つ目は私たちの上にあるものに対する畏敬です。腕を十字にして胸にかかけ、朗らかに天を見あげる身ぶりを、私たちはまだ幼い子どもたちに課し、同時に彼らから、あの上には神さまがいらして、両親や教師や目上の者たちの姿となって出現するのだという証言を望んでいるのです。二つ目は私たちの下にあるものに対する畏敬です！ 両手を背中で組みあわせ、いわば結びつけ、微笑みながら視線を落とす身ぶりは、大地に気持ちよく朗らかに目を向けなければならないことを示しています。大地は食物を得る機会を与えてくれます。言葉にできない喜びを授けますが、他方で途方もない苦しみをもたらすこともあります。非のあるなしにかかわらず身体を痛めたり、故意にせよ偶然にせよ他人に傷つけられたり、地上の意志なきものに苦しめられる場合には、このことをよく考えなければなりません。そのような危険は一生涯つきまとうものですからね。しかしこの段階の教えが私たちの生徒に十分に効き目を果たしたと確信すれば、私たちはできるだけ早く彼をこの姿勢から解放してあげます。それから私たちは、彼に奮起を促し、仲間たちに向かい彼らにならって整列することを命ずるのです。すると彼はまっすぐに堂々と起立し、自分勝手にばらばらになったりすることはありません。自分と同じような者と結束することによってのみ、彼は世界に対して向きあうことになりま

す。これ以上のことを私たちはもはやつけ加えることはできないでしょう。

「わかります」とヴィルヘルムは返した、「悪意を抱いたり陰口をたたくばかりの状況に快感を感じているせいで、民衆たちはあれほど酷い状態なのでしょう。そのような状況に身を委ねてしまう者は、まもなく神に対して無関心になり、世間に対して軽蔑的にふるまい、自分と同じような者を憎悪するようになります。なくてはならない真の自負心は、高慢さと不遜のなかで粉々にくだけ散るのです。」「それにもかかわらず、お許しいただき」とヴィルヘルムは続けた、「ひとつだけ異議を唱えさせてください。」「昔から、巨大な自然現象やその他の説明しがたい不吉な現象に対して抱く未開民族たちの恐怖心は、そこから少しずつより高貴な感情や純粋な志向が育つ胚芽とみなされてきたのではありませんか?」これに彼らは返した、「自然にふさわしいのは恐怖心であり、畏敬ではありません。人は既知のあるいは未知の巨大な存在を恐れます。強者は戦い、弱者は避けようとしませんが、どちらもそこから解放されることを願い、わずかのあいだでもそれを遠ざけ、自分たちの自然が回復し自由と独立をある程度取りもどすと幸せを感じるのです。自然人はこうした操作を人生で何百万回もくり返します。恐怖から自由に向かって努力するけれども、自由から恐怖へと駆りたてられ、少しも先に進めないのです。恐れることは容易ですが、厄介です。畏敬をもつことは難しいですが、快適です。人間は畏敬を抱く決心をしたがりません。むしろ、しないと言ってもよいでしょう。畏敬は人間本性に与えられねばならないより高次の感覚なのです。それは特別に恵まれた人々のものでしか自発的に展開しませんので、そのような人は昔から聖人や神とみなされてきました。これこそがあらゆる真の宗教の品格であり、なすべき仕事です。そしてその祈りを捧げる対象にしたがえば、宗教にはただ三種類が存在するだけなのです。」

男たちは話すのをやめた。ヴィルヘルムは考えこみ、しばらく沈黙した。しかし彼らの奇妙な言葉の意味を解釈してやろうと思いががることはせず、尊敬すべき人々に話を続けるように頼んだので、彼らもすぐにその願いに

応えた。「どんな宗教でも」と彼らは言った、「恐怖にもとづく宗教を私たちは評価しません。人間の内部に畏敬が働いていれば、他者を敬い、自身への尊重を保つことができます。恐怖を抱く者のように自分自身と不和になることはありません。私たちの上にあるものへの畏敬にもとづく宗教を、私たちは種族的宗教と呼んでいます。それは諸民族の宗教であり、低級な恐怖からの最初の幸福な脱却です。別にどのような名前と呼ばれようとも、いわゆる異教的宗教のすべてがこれに属しています。第二の宗教は、私たちと同等のものへの畏敬にもとづいており、私たちはこれを哲学的宗教と呼んでいます。というのも中心に立つ哲学者は、自分より高いところにあるものをすべて自分のもとに引きさげ、自分より低いところにあるものをすべて自分のもとに引きあげ、この中間状態においてのみ賢者の名に値するのです。自分と同等のもの、つまり全人類に対する関係やその他のあらゆる地上的環境に対する関係を洞察することで、哲学者は宇宙的な意味で真実のなかに一人で生きるのです。さて、第三の宗教について語るときがきました。それは私たちの下にあるものへの畏敬にもとづく宗教で、これを私たちはキリスト教的宗教と呼んでいます。なぜなら、そこにはキリスト教精神がもっとも顕著に現れるからです。これは人類が達することのできた、また到達しなければならなかった究極のものなのです。それにしても、大地を自らの下に横たわせ、自らはより高いところで生まれたことを主張しつつも、卑しさや貧困、嘲りや嘲笑、衰弱や不幸、苦しみや死を神的なものと認め、罪や犯罪すら神聖さを妨げるものでなく助長するものであると讃え、これを愛するためには、どれほどのものが必要だったことでしょう。これについて、もちろんどんな時代にも痕跡は見つかります。しかし痕跡は目的ではありません。一度目的に到達したからには、人類はあと戻りすることはできません。別の言い方をすれば、キリスト教は一度現れたからには、二度と消滅することはできないのです。一度、神の姿で具現したからには、再び解体されることはできないのです。」

「あなたがたはこれらの宗教のうちのどれをとりわけ信仰されているの

ですか？」とヴィルヘルムは言った。「三つすべてです」と三人は一斉に
 応えた、「というのも、これらは一緒になって真の宗教を生み出すのです
 から。これら三つの畏敬から、最高の畏敬、つまり自分自身への畏敬が生
 まれるのです。そして三つの畏敬は再び自分自身への畏敬から発展し、そ
 の結果、人間は到達しうる最高のものにたどりつき、人間は自分を、神や
 自然がもたらした最善のものともみなすことができる、それどころか、うぬ
 ぼれや利己心によって再び卑俗なものに引き寄せられることなく、高みに
 とどまることができるのです。」

「そのように展開されると、このような信仰告白にも驚きはいたしません
 」、とヴィルヘルムは言った、「他の人たちを分けへだてるものが、あな
 たがたをひとつに結びつけているという点を除けば、人生のあちこちで聞
 かれることとすべて一致しています。」それに対して三人は応えた、「この
 ような信条告白はすでに世界の大部分で口にされています、ただ無意識の
 うちにはありませんが。」

「いったい、どこで、どのようにですか？」ヴィルヘルムは尋ねた。
 『使徒信条』のなかです！」彼らは大きな声で叫んだ、「第一節は種族的
 であり、すべての民族に関連します。第二節はキリスト教的であり、苦
 悩と戦う者や受難のなかで栄光を得た者のためにあります。そして第三節
 は、聖人たち、つまり最高度の善人と賢者たちの熱狂的な共同体について
 教えてくれます。このような確信や約束は神の三位一体という比喩や名
 のもとで語られているわけですが、この三つの神の位階が最高の統一とみな
 されるのも当然のことではないでしょうか！」

「あなたがたが私を」とヴィルヘルムは返した、「三種の意義に無縁では
 ない大人とみなし、このように明白に関連づけてお話ししてくださるのは
 ありがたいことです。ふりかえってみますと、あなたがたがこの高貴な教
 えを子どもたちにまずは感覚的なしるしとして、次にいくらか象徴的な響
 きによって伝え、最後に非常に重要な解釈を展開されるということは、ま
 ったくもって正当なことと考えざるをえませんね。」

「そのとおりです」と彼らは応えた、「ご子息を最善の手に委ねたと確信していただくために、さらに見ていただきたいものがありますが、それは明日の朝の仕事に残しておきましょう。ゆっくりお休みになって、元気を回復しておいてください。明日の朝、満足してすっかり心地がついたところで、私たちと一緒に内部をご覧になっていただきましょう。」

第 11 章⁴⁾

最年長の男に導かれ私たちの友は立派な玄関を通りぬけ、円形というよりはむしろ八角形の広間へと足を踏み入れた。そこにはたくさんの絵が飾られていて、新参者を驚かせた⁵⁾。すぐに解きあかすことはできないにしても、目にしたものすべてがひとつひとつ重要な意味をもっているに違いないことは、彼にも簡単に察しがついた。そのことについて同伴者に質問しようとしたとき、男はヴィルヘルムをわきのひとつの画廊に入るように勧めた。そこは一方の側が開放されていて、花の咲きみだれる大きな庭をとり囲んでいた。しかし、この明るい自然の装飾以上に目を引いたのは壁側だった。壁一面に絵が描かれていたのである。初めて足を踏み入れたヴィルヘルムは、そこを歩くうちにまもなく、イスラエル人の聖典がこれらの絵の題材になっていることに気がついた。

「ここでは」と長老は言った、「簡略に言うために私たちが種族的と名づけた、あの宗教が伝えられます。その実質は世界史であり、その外皮はひとつひとつの出来事です。全種族の運命がくり返し反復されることで、人々はこの宗教を理解するのです。」

「あなたがたは」とヴィルヘルムは言った、「イスラエルの民に敬意を示され、その歴史を絵画の基礎に置かれた、あるいはむしろ絵画の主要対象にされたようですね。」「ご覧のとおり」と老人は応えた、「腰壁や小壁に、

4) 2 稿では第 2 巻第 2 章。FA10, S. 424.

5) nunmehr が 2 稿で nun, auszieren が 2 稿で verziern に変更。

同時代というよりむしろ同内容の行為や出来事が示されている点にご注意ください。どんな民族たちのもとにも、同内容の、あるいは同じことを意味する報告が現れるものなのです。中央にはアブラハムが美しい青年の姿をした神々の訪問を受けている場面が描かれていますが、その上の小壁には、アドメトスの羊飼いたちのなかにアポロがいるのをご覧になるでしょう。ここから学ぶことができるのは、神々が人間たちの前に現れるときはたいてい素性を知られぬようにさすらうということなのです。

彼らは観察しながらさらに進んだ。ヴィルヘルムはよく知られた題材の多くを見つけたが、それらは他の場所で見なれたものよりも、もっと生き生きと意味深く描かれていた。いくつかの絵についてヴィルヘルムは説明を求めたが、もう一度、なぜイスラエルの物語がとりわけ選ばれたのかを尋ねずにはいられなかった。それに対して長老は応えた、「あらゆる異教のなかで、というのもイスラエルの宗教も異教のひとつなわけですが、あらゆる異教のなかでこの宗教は大きな特権を有しています。それについて、ほんの少しだけ触れましょう。種族の法廷の前では、つまりそれぞれの民族たちの神の法廷の前では、それが最高の民族かどうか、もっとも優れた国家かどうかは問われず、それが持続するかどうか、もちこたえたかどうか重要です。イスラエルの民は、彼らの指導者、裁判官、首領、預言者たちが何千回も非難してきたように、一度だって重要な役割を果たしたことはありません。徳に欠け、他の民族の欠点をたいていはかね備えています。しかし自主性、確固とした意志、勇敢さにおいて、あるいはこれらがもはや認められないとしても、強靭さにおいてこの民族に勝るものはありません。彼らは地上でもっとも辛抱強い民族なのです。いつの時代でもエホバの名を讃えるために、今もかつて、そして未来においても存在するのです。それゆえに私たちはこの民族を典型として中心に描いたのです。その他の民族はそれをとりまく額縁の役目を担うにすぎません。」

「あなたと議論するのはこの場にふさわしくありません」とヴィルヘルムは返した、「あなたは私に教授する立場なのですから。そこでこの民族

の、あるいはこの民族の歴史や宗教が有するもっと別の長所について説明していただけますか。」「ひとつの主要な長所は」と相手は応じた、「その聖典の卓越した蒐集です。幸運なことにそれらはひとつに集められていますので、どんなに疎遠な要素からも統一感が現れると見間違ふほどです。好奇心を満たす程度には十分完結しており、かつ断片的なところが人を刺激します。未熟なところが誘惑的ですし、繊細なところが心を和ませます。その他にも相対立する諸々の特徴がこれらの書物、またこの一冊の書物に共存しており、それはなんと称讃されるべきことでしょう！」

中心になっている一連の絵画も、またその上下に添えられた小さめの絵の関連性も来客者にあまりに多くのことを考えさせたので、ヴィルヘルムは同伴者の重要な説明にほとんど耳を傾けようとせず、その説明は対象に興味を引きつけるよりも、むしろ彼の注意力をそらせてしまうように思われた。しかし折を見て同伴者は言った、「ここでイスラエル人の宗教のもうひとつの長所を説明しましょう。彼らは自分たちの神を決して偶像化しなかったため、神に品位のある人間の姿を与えたり、逆に動物や怪獣の姿によって邪悪な偶像崇拜を示したりする自由を私たちに残しました。」

私たちの友は広間をさっと一周し、世界史を一からありありと思いうかべた。出来事に関して、彼にとって二、三の新しいこともあった。こうして絵と絵の組みあわせや同伴者の省察を通じて、彼にはいくつかの新しい見解が生まれてきた。こうした立派な感覚的描写によってフェーリクスが偉大で意味深く模範的な事件を一生涯、現実のこととして、自分のそばで生き生きと実在したものとして習得することを、彼は喜んだ。最後にはこれらの絵を子どもの目線からのみ観察し、その意味で彼は完全に満足した。こうして二人はついに混乱した悲しい時代にたどりついた。町や寺院は破滅され、不屈の国民たちは殺され流され、全員が奴隷になった。この国家のその後の運命が寓意的に描かれていたのは賢明なやり方だった。というのも、これらが史実にそくして生々しく描かれることは高貴な芸術の範囲を超えているからである。

これまでめぐってきた画廊はここで唐突に終わり、ヴィルヘルムはこれで最後だったことを奇妙に感じた。「私は」と彼は案内人に言った、「この歴史の流れには欠落があるように思います。エルサレムの寺院は破壊され、民は散り散りになりましたが、その少し前にそのことを人々に説き、しかし誰も聞く耳をもとうとしなかったあの人の姿をした神は登場しませんでした。」

「あなたのご希望どおりにすると、それは誤りだったでしょうね。あなたが描写された神のごとき男の生涯は、彼の生きた時代の世界史にはまったく関係がありません。それは個人的な生涯であり、彼の説教は個人のための教えだったのです。集団としての民衆やその構成員に公にふりかかることが世界史の要素であり、私たちが第一の世界宗教とみなすものなのです。個人の内面に現れることは、第二の宗教つまり賢者の宗教に属するものです。キリストが地上をさまようあいだに教え、実践したのはそのような宗教でした。それゆえに、ここで外的なものが終わり、今からあなたに内的なものを開示いたしましょう。」

ひとつの扉が開き、彼らは同じような画廊に入っていった。ヴィルヘルムはすぐに、そこにあるのが第二の聖典の絵画であると見てとった。それらは最初の絵とは別の画家によるものらしかった。人物、動き、周囲の世界、光、色彩、すべてがより穏やかに描かれていた。

「ここであなたをご覧になるのは」、絵画の一部を通りすぎたあと、隣りを歩く男は言った、「行為でも出来事でもなく、奇跡と比喻なのです。ここにあるのは新しい世界、先ほどのものとは異なる新しい外部、そして先ほどには欠けていた内的なものなのです。奇跡と比喻を通じて新しい世界が開かれます。奇跡はありきたりのものを特別なものに、比喻は特別なものをありきたりのものにするのです。」「お願いですから」、とヴィルヘルムは返した、「そのわずかのお言葉の意味をもう少し詳しく説明していただけませんか。自分ではうまくできそうにありませんので。」「ごく自然な意味ですよ」と長老は応えた、「もちろん深淵ではありますが。その意味

を理解するには、いくつか例を挙げるのが一番早いでしょう。飲食以上にありふれた日常的なものはありません。しかしただの飲み物を醇化し、食べ物を増やして多くの人々に行きわたらせることは特異なことです。病氣や身体の不具合ほど日常的なことはありませんが、これを精神的な手段あるいはそれに似た手段でおさえ、和らげることは特別なことでしょう。まさにここから、ありきたりのものと異常なもの、可能なものと不可能なものがひとつになるという奇跡の不可思議さが生じるのです。比喩や寓話の場合はその反対です。ここでは意味、洞察、概念が高次のもの、特別なもの、到達しがたいものなのです。概念がありきたりの、平凡でわかりやすい形象に具現化され、生き生きと目の前に現実となって現れ、私たちがそれを我がものとし、つかまえ、とらえて離さず、同類のものと交わるようにそれとつきあえるならば、それは第二の奇跡です。第一の奇跡と正當に並べられる、それどころか、ひょっとするとそれ以上に優遇されるべきでしょう。ここには生命をもった教えが表現されており、それは争いを引きおこすことのない教えです。何が正義で何が不正かについての見解ではなく、それ自身が抗うことのできない正義あるいは不正そのものなのですから。」

画廊のこの部分は前よりも短かった。というよりも中庭をとり囲む部分の四分の一にすぎなかった。しかし二人は最初の画廊ではただ通りすぎるだけだったのに、ここではとどまることを望み、行きつ戻りつした。絵の主題はそれほど目立つものではなく、変化に富んでいるわけでもなかったが、それだけいっそう、その深淵で寡黙な意味を探求したい気持ちにさせるのだった。二人の散策者が廊下のつきあたりでひき返すときも、ヴィルヘルムは、ここでは最後の晩餐、つまり師匠が弟子たちと別れるところまでしか行きつかなかったことに対して疑念を口にした。彼は物語の残りの部分について尋ねた。

「何を教えるにも伝えるにも」と長老は応えた、「私たちはおよそ区別できるものは区別することを好みます。そうすることによってのみ、重要

なものの概念が若者たちに生まれてくるのです。人生とはとにかくすべてをごちゃ混ぜにします。そこで私たちは、ここでもあの卓越した男の生涯をその最期から切り離したのです。人生において、彼は真の哲学者として出現します——この表現につまずかないでください——最高の意味での賢者ということ。彼は自分の場所にしっかりと立ち、我が道を迷うことなく進みます。低いものを自分と同じレベルに引きあげ、無知な者、貧しい者、病気の者に、自分の叡智、富、力を分け与えることで、彼は人々と同じところに存在するように見えるのです。しかし別の側面からは、彼はおのれの神としての起源を否定しません。彼は神と同列に立とうとし、あえて神であると公言することも辞さないのです。このように彼は若いころからまわりの人々を驚かせ、その一部を自分の味方につけますが、他の人々を刺激し敵対させます。そして教育や生活において一定の高みを指すすべての人に、世界から何を期待すべきかをお示しになります。あの方の遍歴は、高貴な人々にとって彼の死よりも学ぶことが多く実り豊かなのです。誰でもあの方のような試練には遭いますが、彼のような死を迎える者はほんのわずかですから。さあ、こうした考察の結果はみな忘れて、感動的な最後の晩餐の場面をご覧ください。ここでこの賢者はいつもと同じように、弟子たちを文字どおり孤児として置き去りにされるのです。善良な弟子たちを気づかいながら、同時に、自分や彼よりも立派な者たちを破滅させることになる一人の裏切り者にも食事を与えておられます。」

こう言いながら長老がひとつの扉を開けると、ヴィルヘルムは入り口の最初のホールに再び戻っていたので驚いた。二人がこのあいだに中庭を囲む回廊をぐるりと歩いて元に戻ってきたことは、彼にもよく理解できた。「私は」とヴィルヘルムは言った、「最後までご案内いただけると期待していましたが、ふりだしに戻されましたね。」「今回はこれ以上お見せすることはできません。あなたが今、一巡された以上には、私たちは生徒たちにも見せることはありませんし、説明することもないので。ごく世俗的な外的なことは誰にでも若いころから説明しますが、精神や心にかかわる

特別に内的なことは、いくらかの思慮をそなえて成長していく者にだけ説明します。残りの部分は一年に一度だけ開かれ、私たちはそれらを卒業していく者たちにもみ分かち与えることができますのです。私たちの下にあるものへの畏敬から生まれる最後の宗教、敵対するもの、醜悪なもの、避けるべきものに対するあの尊敬の心を、私たちは花嫁支度のように生徒ひとりひとりに持たせ、世間に旅立たせるのです。そうすれば、そのような欲求が彼らのなかに兆したときに、どこに同じようなことを見いだすべきかがわかるでしょう。あなたには私たちの総合祝祭のために一年後に再訪され、ご子息がどれだけ成長されたかをご覧になることをお勧めします。そのときはあなたにも苦悩の聖殿をご覧いただきましょう。」

「ひとつ質問させてください」とヴィルヘルムは返した、「あなたがたは、この神のような方の人生を教義と模範の形象に定めておられますが、彼の死も同様に崇高な寛容さの手本として強調されたのですか?」「どんな場合も」と長老は言った、「私たちは隠したりしませんが、あの方の受苦はヴェールで覆います。その理由は、これらの苦悩を非常に尊重しているからこそなのです。瀆神の世界がこのおぞましい光景を見るように強いたとき、太陽もその面を隠したというのに、あの拷問台とそこで苦しむ聖なる方を白日のもとにさらけ出し、受苦の神的な深淵さが隠されたこの深い秘密をもてあそび、ふざけ、美化し、もっとも品位のあるものが卑俗で無趣味に見えるまでやめないとすれば、それは唾棄すべき破廉恥行為だと私たちは考えています。ご子息のごことでご安心いただき、多かれ少なかれなんらかの望ましいやり方で教育され、どんな場合も混乱せず、動じず、落ちつきのある姿で再会できると確信していただくのに、今日のところはこれで十分といたしましょう。」

ヴィルヘルムは玄関の絵画をじっくりながめながら、ためらいがちにその意味の解釈を望んだ。「これも」と長老は言った、「来年までお預けにしましょう。それまでの期間、子どもたちに与える授業に外部者を入れることはありません。しかし一年後にお越しになり、私たちの最良の語り手た

ちがこれらの絵の対象について公衆の前で何を言うのが有益であるとみなしているかを、ぜひお聴きになってください。」

こうしたやりとりのあと、まもなくして小さな扉をノックする音が聞こえ、昨日の監督者が現れた。彼はヴィルヘルムの馬を引いてきたのだった。そこでヴィルヘルムは三人会に暇乞いをした。彼らは別れの際、監督者にヴィルヘルムを次のように推薦した。「この方はもう信頼のおける仲間の一人です。この方からの質問に何を回答すべきか、君にはわかっているね。彼は私たちのところで見聞したことについて、まだ知りたいと望んでおられるに違いない。節度と目標は君も知っているとおりだよ。」

ヴィルヘルムはもちろんまだ二、三の質問を胸に抱いていたので、それをすぐにうちあげた。彼らが馬で通りすぎると、子どもたちは昨日と同じような姿勢をとった。しかし今日は、まれではあるが何人かの少年は通りすぎる監督者に挨拶をせず、自分の仕事から目もあげずにこっそりと行くがままにさせていた。ヴィルヘルムはその理由とこの例外をどう解釈すればよいのかを尋ねた。監督者の回答はこうだった。「これにはもちろん重大な意味があります。というのも、それは私たちが生徒たちに課するもっとも厳しい罰なのです。彼らは畏敬を示す資格がないと宣告され、自分が粗野で教養に欠けていることを表明するよう強制されているのです。しかし彼らはこの状況から逃れるために、できることを行ない、瞬く間にどんな義務にも適応していくのです。しかし若者が強情に元に戻ろうとしない場合には、簡にして要をえた報告とともに、両親の元に送りかえされます。規則にしたがうことを学ばない者は、規則が有効な地域から立ち去らなければなりません。」

別の光景が、昨日も今日も遍歴者の好奇心をそそった。生徒たちの服装の色や型がさまざまだったのだ。そこに等級があるようには見えなかった。異なる挨拶の仕方をする者たちが同じ服装であったり、同じ挨拶をしているにもかかわらず服装が異なることもあったからだ。ヴィルヘルムはこの一見矛盾することの理由について質問した。「その矛盾は」と相手は返し

た、「それが少年たちの心情をわざと探求するための手段である、ということでは解消します。私たちはその他の点では厳密さと秩序を重んじていますが、服装の場合はある程度好きなようにさせているのです。私たちが蓄えている布地や縁飾りの範囲内で、生徒たちは好きな色を取り、適切な節度を保って形や型を選ぶことが許されているのです。これらを私たちは注意深く観察します。色からは人間の感性が、型からは生活様式がわかりますから。しかし人間本性のある特別な特異性が、より正確な判断をいくぶん困難にします。それは模倣の精神、同調しようとする傾向です。生徒がそれまでにまだなかったものに飛びつくことは非常にまれで、たいていは既知のもの、ちょうど目の前に見ているものを選ぶのです。しかしこのような考察も実りがないわけではありません。そのような外面的なものを通じて、生徒たちはあれこれの党派に分かれ、あちらこちらで仲間を作ります。こうしてより一般的な志向が際だち、私たちは各自がどこに傾き、どのような手本にしたがうのかを理解するのです。」

「こうして私たちは、生徒たちの心が一般的なものに傾き、ある流行がすべての子どもたちのあいだに広まり、孤立したものもみな失われ統一されていく場合をいくつも見てきました。そしてそのような変化を私たちは控えめなやり方で阻止しようと、在庫をなくしてしまいます。いくつかの布地、飾りはもはや手に入れることができません。代わりに新しいもの、魅力的なものを補充します。明るい色や短いタイトな型で陽気な子どもたちを、落ちついた色あいやひだの多い快適な衣服で慎重な子どもたちの心を誘います。こうして少しずつ均衡を取りもどすのです。」

「というのも、私たちは制服をまったく嫌悪しているのです。制服は性格を覆い隠してしまい、他のどんな仮装よりも子どもたちの独自性を指導者の目から奪ってしまいます。」

あれこれと話しているうちに、ヴィルヘルムはこの地区の境界に到着した。しかもそこは、あの老友の指示にしたがって、遍歴者が彼の目的に向かって進むために立ち去るべき地点であった。

別れ際に監督者と取り決めが交わされた。ヴィルヘルムは一年後に再び来訪することになった。ちょうど三年に一度の大きな祝祭があり⁶⁾、このお祭りには両親がみな招待され、立派に成長した生徒は突然自由の身となり卒業するというのである。そのときにはヴィルヘルムも好きなように他地区にも足を踏み入れてよい、そこでは独自の原理にそくして、完璧な環境のなかで個々の授業が授けられ、実施されているということだった。

「ヘルジーリエからヴィルヘルムへ」⁷⁾

親愛なる大切なお友だちに一言だけ言わせていただきたいのですが、あなたは間違っているらしいです。とはいえ、あなたが自分の信念にしたがって行動されているという点では、あなたは間違っていないらしいません。あのくるみ色の少女は見つかりました、会って、話をして、相手のことを知り、よく理解しました。そうあなたはおっしゃり、同時に、この稀有な方に対し彼女独特のやり方でこれ以上好ましい状況を望んだり、現在の状況で本当に役立つことを申しでることなど不可能である、そうきっぱり断言されています。

今、あなたはこの不思議な女性の居場所をうちあけることに躊躇されています。それはあなたご自身の良心には折りあうことでしょうか、私たちに対しては無責任というものです。彼女が順調であることをレナルドーに断言して、あなたは彼をなだめすかすおつもりです。確かに彼は言いまし

6) 2稿では少し変更される：「まず監督者は、大きな祝祭がすべての関係者にさまざまなやり方で告知されるまで、ヴィルヘルムには待っていただきたいと述べた。」FA 10, S. 433. 2稿でヴィルヘルムが教育州を再訪するのは一年後ではなく、数年後となる。

7) 2稿ではここから第2巻第3章へ。語り手が架空の編集者として登場し、ノヴェレ「50歳の男」に先立つ短い序言で物語挿入の意義について述べる。Ebd. 以下の「ヘルジーリエからヴィルヘルムへ」の書簡は2稿では完全に削除される。

た、そのときは安心すると、ほとんど誓いました。でもあの情熱的な男は他の人や自分に対して何も誓いはしないのです！ ですから、これでは事はちっとも片づいていないのです。あなたによれば彼女は幸せです。自身の活動や労働を通じて幸せだと言います。でも次に彼は、どんな風に？ いつ？ どこで？ が知りたいのです。最悪なのは私たち姉妹もぜひ知りたいと思っていることです。あなたが発発されて半年が経ちました。一年が過ぎる前にあなたが私たちのところに顔を出されることは望めません。あなたに強いられた永遠のゲーム⁸⁾を抜け目なく上手にかわして、私たちの近くにお越しくださることはできないでしょうか？ ナイトを使えば、同じ目に戻ることなく、チェス盤の目を自在に飛びまわることができますわ。この芸当にあなたが長けてくだされば、あなたの友人たちはそれほど長くあなたを恋しがらずに済むのですけれど。

あなたに対する私の善意をはっきりお認めいただくために、私は二人の愛すべき方々が旅の途上にあることをうちあげましょう。出発点と目的地は言いません。彼女たちを描写することも、褒めもしません。若い女性と中年の女性ですが、どちらかを選ぶことは心が痛みます。若いほうはとても愛らしく、誰もが彼女に愛されたいと望まずにいられません。中年のほうはとても魅力的で、彼女と暮らしたい、たとえ愛されなくても一緒に暮らさずにはいられません。あなたがこの秀でた女性たちに囲まれて三日間を過ごし、四日目の朝、あなたの厳格な誓いがあなたのお役に立つことを願っておりますわ。少々の予備知識として、二人の女性に関係する物語を送ります。この物語の何が真実で何が創作かは、彼女たち自身を通してあなたに探っていただきましょう。

8) Rouge et noir。ミュンヘン版の注によると「赤と黒のマス目盤を使った賭け事 (Glückspiel)」(MA 17, S. 1093)。ここではチェスのイメージで訳した。

50歳の男⁹⁾

少佐が屋敷の中庭に馬で乗りつけた。姪のヒラーリエが館に通じる外の階段に早々に立っており、彼を迎えた。少佐にはほとんど見わけられないほど、彼女はまたしても大きく、そして美しく成長していた。自分をめがけて飛びこんできた彼女を、彼は父親のような気持ちで胸に抱き、それから二人は彼女の母親のもとへと急いだ。

妹である男爵夫人も同じように彼を歓迎した。ヒラーリエが朝食の準備のために急いで出ていくと、少佐は嬉しそうに言った、「今度こそぼくら

9) ここから「ヒラーリエの追伸」の前まで、初出はコッタ書店発行の1818年版『婦人年鑑』(1817年刊行)に「50歳の男」のタイトルで公表された。*Taschenbuch für Damen auf das Jahr 1818*. Tübingen in der J. G. Cotta'schen Buchhandlung, S. 1–34. 『婦人年鑑』は Bayerische Staatsbibliothek のデジタル・アーカイヴで閲覧可能。<http://opacplus.bsb-muenchen.de/title/10615522/ft/bsb10925253?page=57>(最終閲覧2021年12月18日)。『婦人年鑑』と初稿における「50歳の男」の異同は、「くるみ色の少女」(1816年版『婦人年鑑』)と同様に、細かい語彙、語順、綴りのレベルでの修正や文章の推敲が全体にわたって多数存在するが、内容にかかわる変更はなかったため、本稿での異同の指摘は省略した。ちなみに前年の1817年版『婦人年鑑』には「新メルジーンネ」の前半が公表されており、ゲーテは二つの物語を中断したまま、シェヘラザードのように読者の好奇心をつなぎとめていた(1816年1月10日付けコッタ宛て書簡 *Goethe und Cotta. Briefwechsel 1797–1832*. Textkritische und kommentierte Ausgabe in 3 Bänden. Hrsg. von Dorothea Kuhn, Bd. 2, Stuttgart 1979, S. 5.)。今度こそ「くるみ色の少女」の続きを期待するコッタに対し、ゲーテはまたしても新しい物語「50歳の男」の導入部を送り届けた。「私はすでに『婦人年鑑』に二つの謎を委ねていますが、三つ目が続きます[……]」(1817年5月27日付けコッタ宛て書簡 Ebd., S. 44.)。「50歳の男」の詳しい成立事情については、拙稿「若返りと老いの物語——ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテの『50歳の男』」(磯崎康太郎、香田芳樹編著『晩年のスタイル——老いを書く、老いて書く』松籟社、2020年所収)69–95ページ、特に75–78ページを参照。

の仕事は片づいたと断言できるよ。兄さんの宮内大臣は、自分では小作人とも管理人ともうまくいかないことがよくわかったのさ。生きているうちに地所をほくらやほくらの子どもたちに譲渡することになる。彼が条件として要求する年俵は確かに相当な額だが、ほくらはいつでも彼にそれを支払うことができる。それでもほくらは目下のところ多くを得ることができるし、将来においてはすべてが手に入るんだ。この新しい計画をまもなく軌道にのせるつもりだ。まずはほくの免職があるだろう。しかし再び活動的な生活が始まり、ほくたちや家族たちに決定的な利益をもたらしてくれる。ほくたちは、子どもたちの成長を落ちついて見守るんだ。彼らの結婚を早めるのは、ほくたちや子どもたちしだいというわけだ。」

「それはすべて結構なお話ですけど」、と男爵夫人は言った、「もしあなたにある秘密を明かす必要がなければねえ。私自身もほんの最近気づいたことなのです。実はヒラーリエの心にはもう決まった人がいます。この面で、あなたの息子はほとんど、いえ、まったく望みが無いのです。」

「何だって？」少佐は叫んだ、「そんなことがあるだろうか？ ほくたちが経済的な見通しのためにあらゆる手を尽くしているのに、愛情がほくたちにそんな悪さをするなんて！ ねえ、早く言っておくれ、ヒラーリエの心をつかむことができたのはいったい誰なんだい？ 実際にもうどうしようもない状況なのかい？ ひょっとして取り消すことを期待できそうな、一時的な印象ではないのかね？」

「まずはちょっと自分で考えて、当ててみてください」と男爵夫人は応じ、彼をますます焦らせた。彼の我慢が限界に達したところにヒラーリエが朝食を運ぶ給仕たちとともに入ってきたため、すぐに謎解きすることはできなくなった。

少佐自身、つい先ほどとは異なる目でこの美しい子をながめているような気がした。こんなに美しい心のなかにその姿を印象づけることができた幸せな男に、まるでほとんど嫉妬しているようであった。朝食も美味しく感じられず、すべてが彼の好みに合わせて、いつも望んでいたとおり、要

求してきたとおりに用意されていたことにも気づかなかった。

こうして話もとぎれて沈黙してしまうと、ヒラーリエのほうでも持ち前の陽気さをほとんど失ってしまった。男爵夫人は動揺して娘にピアノを勧めた。しかし才気あふれる情感豊かな演奏も少佐から称讃を得ることはできなかった。彼は朝食もこの美しい子もできるだけ早く遠ざけてしまいたいと望んだ。男爵夫人は中座を決めるしかなく、兄に庭に散歩に出ましようかと提案した。

二人きりになると、少佐は急いで先ほどの質問をくり返した。それに対して妹はしばらく間をおいたあと、微笑みながら応えた、「もし彼女に愛されている幸福者を見つけだそうと望むなら、遠くに行く必要はありませんわ。その人はすぐ近くにいるのです。彼女が愛しているのはあなたなのですもの。」

少佐は驚いて立ちつくした。それから叫んだ、「そんなことを説きふせるつもりなら、それは非常に時宜を得ない冗談というものだし、真面目に言っているなら、それは私を狼狽させ不幸にするだろう。だって、たとえ時間をかけてこの驚きから立ちなおっても、私たちの状況がこんな予期せぬ事がらのために台無しにされてしまうことは、一目で予測がつくのだから。唯一のなぐさめは、こうした種類の愛情はただ見かけのものにすぎず、その裏に自己欺瞞が隠れているということ、そして真に善良な心の持ち主なら、たいていはおのずから、少なくとも理性のある人間が少し手助けしてやれば、すぐにこんな過ちから立ちなおると確信していることだな。」

「そうは思いませんわ」と男爵夫人は言った、「あらゆる兆候からして、ヒラーリエを満たしているのは非常に真面目な感情なのです。」

「そんな不自然な感情を自然な本性をもつあの娘が抱くとは私には思えなかったんだが」と少佐は応えた。

「それほど不自然なことではありませんわ」と妹は言った。「私の若い頃を思いだしてみても、私自身、あなたよりもずっと年上の男性に恋をしましたもの。あなたは50歳。ドイツ人男性としてはまだ歳を取りすぎてい

るわけではありません。もっと元気のいい他の国の男性なら、ずっと早く歳を取るのかもしれませんがね。」

「どうやって君は自分の憶測を証明しようっていうんだい？」と少佐は言った。

「憶測ではありません、確信です。詳しいことはおいおいお聞かせしますわ。」

ヒラーリエが二人の仲間に加わった。少佐は意に反してまたしても気が変わるのを感じた。彼女がいることが彼には以前よりもずっと好ましく、ずっと価値あることに思われたのだ。彼女のふるまいは一段と愛情がこもったように思われ、早くも妹の言葉を確信しはじめていた。この気持ちは彼にとってこの上なく心地よかったが、彼はそれを認めようとも、許容しようともしなかった。ヒラーリエが非常に愛らしかったのは当然だった。彼女のふるまいには、恋する男に対する愛情からの気おくれと伯父に対するうちけた気安さが結びあっていた。つまり、彼女は本当に彼を心から愛していたのである。庭は春真っ盛りの美しさだった。多くの老木が再び芽を吹いているのをながめ、少佐は自分自身の春の再来も信じる事ができた。愛すべき少女がすぐそばにいて、そのような気持ちに誘われないことがあるだろうか！

こんな風に彼らはその日をずっと一緒に過ごし、団欒の時間は常に大変に心地よいものだった。夕食後、ヒラーリエは再びピアノの前に座った。少佐は今朝とはまったく違う耳で聴いた。ひとつのメロディが別のメロディに絡まりあい、歌が次々に続いた。こうして真夜中になってようやくこの小さな集いは解散することができた。

少佐が自分の部屋に戻ってみると、すべてが昔から慣れ親しんだように快適にしつらえられていた。さらには、かつて彼が喜んでながめて過ごした何枚かの銅版画が別の部屋から移され、かかっていた。いったん気づいてみると、どんな小さなことも細部にいたるまで自分を喜ばせようと配慮されていることがわかった。

その夜、彼はほんの数時間しか眠らなかったが、それで十分だった。早朝には彼の身体は精気を取りもどしていた。しかしここで彼は突然、ものごとの新しい秩序がいろいろ不愉快なことを引き起こすのに気づいた。召使や従者の役割も兼ねていた自分の老馬丁に対して、彼はここ数年、文句を言ったためしがなかった。というのもすべてが厳格な秩序を保ち、いつも同じ要領で進められたからである。馬はきちんと世話され、衣類は適切なきに手入れされていた。しかし主人はいつもより早く目覚め、何もかも具合よく進みそうになかった。

そこにさらに別の事情が加わり、少佐の焦燥とある種の不機嫌が助長されることになった。いつもの彼は、自分のことも召使のこともすべてに満足できた。しかし今は、鏡の前に立ってみると、彼がこうありたいと望んでいる姿ではなかった。髪には白いものがちらほら混じっているのを否定できなかった。顔には皺もいくらか現れたように思われた。彼はいつもより念入りに顔を拭き、いつもより多めに髪粉をふってみた。それでも結局はあるがままにするしかなかった。服装とその清潔さという点でも彼は不満だった。上着にはいつまでも糸くずが、長靴には埃が目につくのだった。老僕は何と言えよいかかわらず、こんなにも変わってしまった主人を目にして驚いていた。

こうしたすべての支障にもかかわらず、少佐はすでに朝早くから庭に出ていった。見つけたいと思っていたヒラーリエを彼は実際に見つけた。彼女は彼に花束を差し出したが、彼はいつものようにキスをして彼女を胸に抱きよせる勇気がなかった。世界でもっとも心地よい困惑を感じ、この先どうなるのかを考えることもせず、彼はその感情のなかに浸っていた。

男爵夫人もそれほど遅れずに姿を現した。ちょうど使者が届けた一枚の手紙を兄に見せながら、彼女は叫んだ。「この手紙が誰の到着を告げたものか、あなたにはおわかりにならないでしょう。」「じゃあ早く明かしておくれよ！」と少佐は応じ、彼の古い友人である俳優が所領からそれほど遠くないところを旅行中で、少し立ち寄るつもりであることを知った。「彼

と再会するなんて楽しみだなあ」と少佐は言った、「聞くところでは、もう若くもないのに、いまだに青年役を演じているらしい。」「あの方はあなたよりも10歳は年上に違いないわ」と男爵夫人は言った。「きっとそうだろう」少佐は返した、「ぼくが覚えているすべてのことから考えてみても。」

しばらくすると、元気で立派な体格の感じのよい男が入ってきた。再会の瞬間、二人は一瞬たじろいだが、すぐに互いのなかに友の姿を認め、あらゆる種類の思い出に会話は花を咲かせた。それから、さまざまうちあけ話、質問そして弁明へと話は移っていった。互いに現在の境遇を報告しあい、まもなくすると、まるで離れ離れだった時間などなかったかのような気持ちになった。

内密にされている話によれば、この男は以前、非常に美しく感じのよい青年だったころ、幸か不幸か、ある貴婦人の寵愛を受けていたのだが、それによって彼は大きな混乱と危機に瀕することとなった。最悪の運命が彼に襲いかかろうとしたまさにそのとき、彼を窮地から救いだしたのが少佐だったのである。永遠の感謝を彼はこの家の兄妹に捧げた。というも妹がちょうどよいタイミングで警告し、用心のきっかけを与えてくれたのである。

食事の前のひととき、男たちは二人きりになった。少佐は旧友の容貌を全体から細部にいたるまで観察して感嘆した。それどころかある種の驚嘆の念を抱かずにはいられなかった。彼はまったく変わっていないように見えた。今も若い恋人役として舞台に立てるのも不思議ではなかった。「いやにじろじろとながめているじゃないか」、ついに彼は少佐に話しかけた、「どうせ昔との違いが大きすぎると思っているんだろう。」「とんでもない」と少佐は返した、「むしろ君の外見がぼくよりもずっと瑞々しく若いのを見て、すっかり驚いているのさ。だって、ぼくが向こうみずな青二才の大胆さで、いわば苦境に立たされた君に手を差し伸べたとき、君はもうひとかどの大人だったんだから。」「君がぼくより老けて見えるとしたら、それ

は君の責任さ」と相手は応じた、「つまり君と同じタイプの人たちみんなの責任だよ。だからといって叱責されることではないが、非難はされるべきだね。誰でも必要に迫られたことしか考えない。こうありたいとは望むけれど、こう見えたいとは考えない。それで十分なうちはそれも結構だろう。だがいずれ実体と外見がかけ離れるようになり、外見のほうが実体よりも早く失われていくとなると、人はみな、内的なことにかまけて外的なことをおろそかにしたのは失敗だった、そんなことをしなければよかったと気づくのさ。」「君の言うことはもっともだ」と少佐は返し、ため息がもれるのをおさえることができなかった。「しかしまったく正しいとは言えないかもしれない」、老いた若者は言った。「もちろんぼくが従事する俳優業で外面を可能なかぎり長く保つための手入れを怠るなら、それは許すべからざる過失だろう。しかし君たちのような別のタイプの間人は、もっと重要な、もっと長続きする別のものに気を配る理由があるのさ。」「しかしだね」と少佐は言った、「内面に活力を感じると、ぜひとも外面ももう一度若返りたいと思うようなときだってあるものだよ。」

客人には少佐の本当の心境を察することができなかったので、この発言を軍人としての意味に受けとり、軍隊において外面がどれほど重要であるか、服装にそれなりに気を使うべき士官なのだから、肌や髪にも注意を向けることができる、などと長々と話した。

「たとえばだね」と彼は続けた、「君たちのこめかみがもう白髪になっていたり、顔のあちこちに皺ができていたり、頭のとっぺんが禿げかかっているのは無責任というものだ。年配の私をまあ見てくれたまえ！ 私がどのように若さを保ってきたか、観察してくれたまえ！ これはすべて魔法なんかじゃない。人が自分を傷つけたり、あるいはせいぜい退屈な時間をつくりだすために費やすよりも、ずっと少ない努力と注意でできることなんだ。」

偶然始まったこの会話が自分にとって大変に好都合だったので、少佐は話をすぐに終わらせたくなかった。しかし彼はやんわりと、旧知の男に對

してすら慎重に事を進めた。「残念ながらぼくは今までそれをなおざりにしてきたんだよ」彼は叫んだ、「もう取りかえしはつかない、諦めるしかないのさ。だからといって、ぼくをこれ以上悪く思わんでくれよ。」

「何も終わっちゃいないさ！」と相手は応えた、「もし君たちのような生真面目な紳士方が、そんなに頑なにこだわりさえしなければね。外面を気にする人を見てすぐに見え坊だと言って、感じのよい社交にいることや自分自身を気に入る喜びを自分たちから奪おうとしたりしなければね。」「君たちの若さを保つ秘訣がたとえ魔法でないとしても」と少佐は微笑しつつ言った、「それでもやっぱり極秘だろうね、あるいは少なくとも、よく新聞で称讃されている類の秘薬なんだろう。そのなかでもっともよい薬を試すことを君たちは知っているのさ。」「冗談にしろ真面目に言っているにしろ」と友人は返した、「君の言うことは確かに当たっているよ。内面よりもずっと早く衰えてしまうことの多い外面に少しでも栄養を与えたいと、昔からたくさんの方が試されてきた。そのなかには本当に貴重な薬や配合薬があるんだよ。ぼくはそれを芝居仲間から教わり、現金で買ったり偶然に入手して自分自身でも試してみたことがある。それを今も使い続け、しかもだからといってさらなる研究を怠ることなく、自分を保ち続けているわけさ。どれだけ言っても誇張じゃあない、ぼくはこの上なく価値のある化粧箱を携えているんだ！もし二週間でもぼくたちが一緒に過ごすなら、この小箱の効用を君にも試してみたいところだよ。」

そのようなことが可能であるとか、その可能性がちょうどよいタイミングで偶然にも自分の身近にもたらされていると考えただけで、少佐の心は朗らかになり、実際にもう外見が先ほどよりも瑞々しく活気づいたようであった。頭や顔を彼の心と一致させられるという期待で元気になり、その薬についてまもなく詳しく知るのだと思うとそわそわして落ちつきを失った。食事の席にはまったく別人となって現れ、ヒラールエの心地よい数々の気配りを悠然と受けいれ、今朝はまだまったく縁のなかったある種の自信をもって彼女を見つめた。

さまざまな思い出話、物語そして気の利いた思いつきによって、この俳優の友人はいったん活気づいた朗らかな気分を持続させ、さらに盛りあげ、高めることができた。ところがこの友人が食後すぐにも別れを告げ、旅を続けようとしたものだから、少佐はますます狼狽した。なんとかして彼は、せめて一夜でも友人に泊まってもらえるようにと、明日の早朝に替え馬の継ぎかえを約束するからとしつこく迫った。とにかく、その内容と使用方法を詳しく知るまでは、効き目のある化粧箱を外に出すわけにはいかなかった。

ぐずぐずしてはいられないと悟った少佐は、食後直ちにこの大切な旧友と二人きりで話そうとした。率直に事を進める勇氣はなかったので、彼はまわり道をしながら、先程の会話を再び取りあげて断言した。自分個人としては喜んで外見にもっと注意を払いたいと考えているのだ。ただし、そのような努力をしている人のことを人々がすぐに見え坊だと言ったり、肉体的な面ではその人に認めざるをえない尊敬の念を、その分、道徳的な面でその人から差し引いてしまうようなことがなければの話なのだが、と。

「そんな決まり文句でほくを不愉快にさせないでくれたまえ！」と友は言いかえした、「だってそんなのは、世間の人たちがたいして考えもせずに使慣れた言いまわしだよ。もっと厳密に言えば、そんな表現には彼らの無愛想な性格と悪意がにじみ出ているのさ。みんながしばしば見え坊だと悪評を立てたがるものがいったい何なのか、君もよく考えてみてくれたまえ。誰だって自分自身に喜びを感じるべきだし、そういう人は幸せなんだ。それなのに、喜びを感じたとき、この甘美な感情を人に見せるのをどうして自らに禁じることができるだろう？ 存在のただなかであって、その存在への喜びを感じていることをどうして隠さなければならないだろう？ お上品な人々が——というのもここで問題になっているのはそうした連中だよ——、こうした表明が度を超えてしまい、一人の人間の自分自身とその存在に対する喜びが他の人々の同様の喜びやその表明を邪魔するほどになった場合に、彼らがこれを非難するのなら、そこに異議はないよ。

実際にこうしたやり過ぎにおそらく最初の非難は由来したに違いない。しかしだね、不可避なことに対して奇妙なほど否定的な厳格さを示して何になるというのだろうか？ なぜ、たいしたことじゃない、我慢できると考えようとしないのだろうか？ だって多かれ少なかれ、自分だってときには自分に許している気持ちの表れじゃないか。そうだよ、こういった表明がなければ、品のある社会なんてまったく存在できないんだよ。だって自分自身への愛着や、この自己感情を他者に伝えたいという欲望が、人を好ましい存在にするんだ。自分自身を優美に感じるのが、人を優美にするんだよ。どうかすべての人間が見え坊でありますように！ もちろん自覚をもって、節度を保ち正しい意味でね。そうすれば、ぼくたちは教養ある世界でもっとも幸せな人間になれるだろう。女性は生まれつき見え坊だと言われている。それが彼女たちに似つかわしく、ぼくたちはますます女を気に入るわけだ。見え坊でなくてどうして若者が人格形成できるだろう？ 中身が空っぽの人間でも、少なくとも自分に外面的な見栄えを与えることができるだろうし、有能な人間なら、まもなく外面から内面へと自己形成していくだろう。そしてぼくに関して言えば、ぼくには自分をもっとも幸福な人間とみなす理由がある。なぜなら、従事している手仕事によって見え坊であることが正当化され、そうであればあるほど、人々により多くの満足をお届けることができるんだからね。他の人が非難されるところで、ぼくは褒められる。まさにこうした道を踏んで、他の人ならやむなく舞台から退くか、屈辱を感じながら舞台にとどまるような年齢になってもまだ、観客を楽しませ魅了する権利と幸運を手に入れているのさ。」

少佐はこの考察を最後まで聞く気にはなれなかった。見え坊という言葉が彼がもちだしたとき、その真意は友人に適当なやり方で自分の願望を伝える橋渡しでしかなかった。会話がさらに進み目的を見失ってしまうことを恐れ、彼は急いで単刀直入に本題に入った。

「ぼくとしては」と彼は言った、「君の旗に忠誠を誓う気がないわけではないんだ。君がまだ遅すぎはしないと見え、ぼくがなおざりにしてきたこ

とを少しでも取りもどすことができると信じてくれるんだから。君の顔料やポマードそして香油をほくにも少しだけ分けてくれないか。ほくも試してみようと思うんだ。」

「分けると言っても」と相手は応じた、「思うほど易しいことじゃない。ここで重要なのは、たとえばほくの瓶から君にいくらか分けたり、ほくの化粧箱の最良の薬品を半分残していただくではないんだよ。使用方法がもっとも難しいんだ。委ねられたものをすぐに我がものにできるわけじゃない。これとあれがどのように合い、どんな条件のもとで、どんな順番で使用すべきなのか、そのためには訓練と熟考が必要だ。それどころか、今話題になっている事がらに対して生まれつきの才能がなければ、訓練も熟考もなかなか実ることはないだろう。」

「どうやら君は」と少佐は返した、「そろそろ手を引こうとしているようだ。確かに君の話はいくらかお伽話めいているし、自分の主張を避難させるために、ほくを困らせているんだね。君の言葉を行動で吟味するようなきっかけや機会をほくに与えるつもりは、君にはないわけだ。」

「そんなふうにはかかって」と相手は応じた、「ほくに君の希望をかなえさせることはできないだろう、もしほく自身が君に対して、最初に君に申しでたような善意をもっていないとすればね。ねえ、考えてみてくれたまえ。人間には、他人を自分の意見に改宗させたいという奇妙な願望があるものだ。自分のなかでよいと思っているものを自分以外の他者のなかにも見だし、自分自身が楽しんでいるもので他の人をも楽しませたい、つまり自らを他者の姿として再び見だし、他者として現れたいという願望だ。なるほどこれは利己的かもしれない、でもそれはもっとも愛すべき、称讃すべきエゴイズムじゃないかな。これがほくたちを人間たらしめたのだし、人間であり続けさせるんだよ。実際に、このエゴイズムからほくは、君に抱いている友情を除けば、君を若返りの術の弟子にしたいという願望を抱くわけさ。しかし中途半端な弟子を育成したがるような師匠は期待できないのだから、どう手をつければよいか、ほくは困っているんだ。さっ

き言ったように、薬も使用方法の説明も十分とはいかないんだよ。使い方は一般論で教えられることではないのでね。君のために、そしてぼくの教えを伝道するという喜びから、ぼくはどんな犠牲も厭わない。目下のところの最大の犠牲をさっそく君に差しだそうじゃないか。君のためにここにいるぼくの使用人を残していくよ。従者のように何でもこなせる男だ。何でも準備でき、すべての秘密に通じているというわけではないけれど、取り扱い全般をかなり理解しているから、最初のうちは君におおいに役立つだろう。君がやがてもっと慣れてくれば、ぼくがより高度な秘密を君にうちあけることができるだろう。」

「なんだって！」少佐は叫んだ、「君の若返りの術にはレベルや階級があるのかい？ 事情に通じた人々に対して、君はまだ秘密をもっているのかい？」

「あたりまえだよ！」相手は返した。「一度に理解でき、初心者到最后の一手まですぐにばれてしまうようでは、役にも立たない技に違いないだろう。」

彼らは長くは躊躇しなかった。従者は少佐に託され、少佐は厚遇を約束した。何に使うのかわからぬまま、男爵夫人は小箱や小筒そしてグラスを差しささなければならなかった。薬の分配が行なわれ、人々は夜まで快活に、ユーモアにあふれた会話をして一緒に過ごした。夜遅くに月が昇ると、客はしばらくしたら戻ってくると約束し、出発した。

少佐はかなり疲れて部屋に戻った。朝は早く起きたし、日中も身体を休めることがなかったのだ。今ようやくベッドにたどりつけると思った。ところが使用人が一人ではなく、今や二人になっていた。これまでの馬丁はいつものやり方ですばやく彼の服を脱がせたが、ここに新しい男が登場し、静かな眠りのなかで効果がより確実に進むように、若返りと美容の薬を投入する真の時間は夜であることをほのめかした。そういうわけで少佐は頭に油を塗られ、顔をマッサージされ、眉毛も塗りたくられ、唇にはクリームを擦りこまれるのを我慢しなければならなかった。さらにまだいくつも

の儀式が必要とされた。ナイトキャップすら直接かぶることは許されず、ネットあるいは上質な皮のキャップを先に被らねばならなかった。

少佐はなんとなく居心地悪く感じながらベッドに横たわったが、その気持ちを確認する間もなくすぐに眠りに落ちた。彼の心のなかに入りこんで語るならば、彼は自分がなんとなくミイラになったような、病人と防腐保存された死体の中間のような気分だった。しかしこの上なく朗らかな希望に包まれ、ヒラーリエの甘い姿に誘われると、彼はまもなく爽快な眠りのなかに引きこまれていった。

馬丁は毎朝、適当な時刻に待機し、主人の着るものはすべて秩序正しく椅子の上に置かれているのが習慣だった。ちょうどそこに付き人が入ってきて、そんなに急いではいけないと激しく抗議した。企てが成功し、多くの苦労や注意と引きかえに喜びを得るためには、焦らず、ゆっくり待たなければならぬと言うのである。主人は言うことを聞いて、しばらく経ってから起きあがり、軽い朝食をとり、それからすでに準備されていた風呂に入らなければならなかった。指示から外れるわけにはいかず、言いつけを守り、そうやって数時間が過ぎていった。

少佐は風呂あがりの休憩時間を短縮し、急いで服を着ようと考えた。彼は生来せっかちなたちで、おまけにヒラーリエに早く会いたくてたまらなかった。しかしここでも彼の前に新しい使用人が立ちほだかり、さっさと終わらせようという習慣は捨てなければならぬと説得した。行動はすべてゆっくりと気持ちよく実行しなければならない、とりわけ身だしなみの時間は自分自身との快適な歓談のひとつきだともみなさなければならない、と言うのである。

付き人の処置の仕方は彼の説明と完全に合致していた。そのおかげで少佐は、鏡の前に立ち、これ以上ないくらい立派に着飾った自分自身を見たとき、確かにいつもよりうまく着こなしていると感じた。あれこれ尋ねることもせず、付き人は少佐の軍服を夜のあいだに改良し、ずっと今風に仕立てなおしていたのである。こんなにすぐに若返りの兆候が現れたことで

少佐の気分は最高に晴れやかになり、内からも外からも若返り、はやる思いで家族のもとに急いだ。

彼は妹が家系図の前に立っているのを見た。昨晚、彼らのあいだで何人かの傍系親族のことが話題になり、かけさせておいたのである。それは未婚の者、遠い国に住んでいる者、まったく消息不明の者たちで、多かれ少なかれ、兄妹あるいはその子どもたちに豊かな遺産を期待させる人たちであった。二人はしばらくこのことについて話したが、これまでの家族の配慮と努力のすべてはひとえに子どもたちに関連していたという重要な点には触れずにいた。もちろんヒラーリエの愛情によって展望が大きく変わってしまったが、少佐も妹も、今この瞬間にそのことを詳しく考える気持ちにはまだなれなかった。

男爵夫人が離れていくと、少佐は一人でその簡略な家系図の前に立っていた。ヒラーリエが彼のそばに並び、無邪気に彼にもたれかかり、家系図をながめて質問した。このなかで誰を知っているのか、いったい誰がまだ生きているのだろうか、と。

少佐は、子どものころのあいまいな記憶からまず年長者たちの説明を始めた。続けてさまざまな父親の性格と、その子どもたちと父親との類似点や相違点を描写し、祖父の性格は孫のなかに再び現れることが多いと主張した。ときおり、よその家族から嫁いできて家系全体の性格を変えてしまう女性たちの影響力についても言及した。何人かの祖先や傍系親族の美德に触れ、彼らの欠点についても隠しはしなかったが、恥ずかしくならざるをえない事からは沈黙してやり過ごした。こうして彼はとうとう一番下の列に到達した。ここには彼の兄の宮内大臣、彼そして妹、その下には彼の息子、そしてその横にヒラーリエの名前があった。

「これらの人々はお互いに十分に顔をつきあわせているね」とだけ言うと、少佐は心のうちをつけ加えることはしなかった。少し間をおいて、ヒラーリエは控えめに声をおさえて、ほとんどため息をつくように返した。「でも上を見上げる者がいても、誰も非難したりなさらないわ！」同時に

彼女は彼を見あげ、その両の目からは彼女の愛情のすべてがあふれていた。「ぼくは君の言うことを正しく理解しているのだろうか？」少佐は彼女のほうに向きなおりながら応えた。「あなたが知らないことを」とヒラーリエは微笑みながら返した、「私は何も言うことはできませんわ。」「君はぼくを太陽の下でもっとも幸福な人間にしてくれるんだね！」そう叫ぶと彼は彼女の足元にひれ伏した。「ぼくのものになってくれるのかい？」「どうぞ立ちあがってください！ 私は永遠にあなたのものです。」

男爵夫人が入ってきた。驚きはしなかったが、彼女はあっけにとられた。「妹よ」と少佐は言った、「これが不幸だとすれば、罪は君にある。だがこれが幸福なら、ぼくたちは君に永遠に感謝するつもりだ。」

男爵夫人は、若いころからどんな男よりも兄を優先するほど自分の兄を愛していた。ヒラーリエの愛情さえ、母親のこの偏愛から生まれたとは言わないまでも、それによって生まれたのかもしれない。三人は今やひとつの愛、ひとつの喜びで結びつき、彼らにとってこよなく幸せな時間が流れた。ただそれでも結局はまた、彼らは周囲の世界のことが気にかかった。世間がこのような感情に共感することはほとんどないのである。

今や息子のことも思いだされてきた。彼にはヒラーリエとの結婚が約束されていて、そのことを彼もよく心得ていた。宮内大臣との交渉が終わりしだい、少佐は駐屯地にいる息子を訪ね、彼と詳細をうちあわせ、この問題を守備よく終わらせるつもりであった。ところが今や思いがけない出来事によって状況はすべて狂ってしまった。いつもは友好的に順応しあってきた人間関係が、今では互いに敵対するように思われ、事がどのような方向に進むのか、どのような気持ちの人々の心をとらえるのか、予測するのは難しかった。しかし息子にはあらかじめ通知をしていたので、少佐は訪問を決行せざるをえなかった。いやいやながらでないとは言えず、いやな予感がしないでもなく、ほんの少しのあいだでもヒラーリエを置いていく苦痛もなくはなかったが、しばらく躊躇したあと、彼は出発した。馬丁と馬は残し、今や彼にはなくてはならなくなった若返りのための付き人と一

緒に、息子の滞在する町に馬車で向かった。

久しぶりに再会した父と息子は心からの挨拶を交わし、抱きあった。互いに言いたいこと、話したいことは山ほどあったが、二人が一番気にかけていることはすぐに言いだしなかった。息子は間近に期待される昇進について夢中になって語り、一方で父親は、資産全般、個々の財産や諸々のために年配の親族たちのあいだで交渉し決定したことについて、息子に詳細に報告した。

会話がいくぶん途切れがちになったとき、息子は勇気を出し、微笑しながら父親に語りかけた。「ぼくを気づかってくれるお父さんの優しさに感謝します。所有地や財産についてはお話ししてくれますが、どのような条件で少なくともその一部がぼくのものになるのかについては語らず、ヒラーリエの名前も引っこめたままですね。ぼくのほうからその名を口にし、あの愛すべき子とまもなく一緒になりたいと、ぼくがうちあけるのを期待していらっしゃるのですね。」

息子のこの言葉に少佐はおおいに狼狽した。しかし、交渉相手の心のうちを探るのが彼の本性にも昔ながらの習慣にもかなっていたので、彼は沈黙し、あいまいな笑みを浮かべて息子をじっと見つめた。「ぼくが何を言わなければならないか、お父さんに言いあてることはできないでしょう」と中尉は続けた、「そこでぼくは、直ちにきっぱりとうちあけてしまおうと思います。こんなにいろいろとぼくのことを心配し、ぼくの真の幸せを考えてくれたお父さんの好意を、ぼくは頼りにすることができます。いつか言わなければなりませんので、すぐに言ってしまうます。ヒラーリエは私を幸せにすることができません！ ぼくにとってヒラーリエは愛すべき親戚で、生涯、親密なあいだがらでいたいとは思っています。しかし別の女性がぼくの情熱をかきたて、ぼくの心をとらえたのです。この気持ちに逆らうことはできません。お父さん、ぼくを不幸にしないでください！」

顔に笑みが広がるのを隠すのに苦労しながら、少佐は息子におだやかな調子で真面目に尋ねた。「いったい誰なんだい、おまえをそんなにも激し

く魅了することのできる女性は？」「この女性と会ってみてください、お父さん。だって彼女のことを言葉で説明することなどできませんし、それでは理解してもらえません。彼女に近づく誰もがそうなるように、お父さんまで彼女に夢中にならないか、それだけが心配です。間違いない！ お父さんを息子のライバルとみなすことになりそうです。」

「いったいどんな女性なんだい？」と少佐は尋ねた。「彼女の人柄を語るができないのなら、せめて彼女の外的な状況について説明しておく。これならずと簡単に話せるだろう。」「わかりました、お父さん」と息子は応じた、「とはいえ、この外的な状況も別の女性の場合には異なったものとなるでしょうし、その女性に異なる影響を与えることでしょう。彼女は、年老いた裕福な夫を最近亡くし、遺産を相続した若い未亡人です。今は独立し、それだけの価値が十分ある女性ですが、たくさんの人に囲まれ、愛され、そして求愛されています。しかし勘違いでなければ、彼女はほくに心を寄せているのです。」

父親が黙ったまま非難の言葉も発しないので気が楽になり、息子は続けて美しい未亡人の自分に対する態度を説明し、彼女のあらがいがたい優美さや好意の表れをひとつひとつ取りあげて褒めそやした。しかし父親には、それは方々から求愛された女性が完全にこの人と決心することもなく、多くのなかから誰か一人を最良にするような軽薄な好意にしか思えなかった。状況が異なっていたならば、彼はきっと息子に、いや、ただの友人であっても、おそらくそうであろう自己欺瞞に注意を向けさせようと試みたことだろう。しかし今回は、もし息子の思い違いでなく、未亡人が本当に彼を愛していて、できるだけ早く息子の求愛に応える決心をしてくれるなら、それは少佐自身にも大変にありがたいことであった。そのため彼は疑念を抱かず、あるいはそのような疑いを拒絶し、いや、ただ口に出さなかっただけかもしれない。

「おまえには混乱させられるよ」と、少し間をおいて父親は話した。「残っている私たち親族のあいだで意見が一致しているのは、おまえがヒ

ラーリエと結ばれることを前提としている。彼女がよその男と結婚すれば、相当の財産をすべて上手に苦心してひとつにまとめたことが台無しになってしまう。特におまえは、おまえの取り分を十分に与えてもらえない。おそらくまだ方法はあるかもしれないが、少し奇妙に聞こえるし、やはりおまえが十分に獲得することにはならないだろう。つまり、もう老いているが、私がヒラーリエと結婚する場合だ。しかしそれでおまえを十分満足させることは難しいだろう。」

「こんな素晴らしいことはありません！」と中尉は叫んだ、「だって真実の愛情を感じることができ、愛の幸せを享受し期待することができる者は、この最高の幸せをそれに値するすべての友やすべての人々に望まないではいられないのです！ お父さんはまだお若いし、ヒラーリエは愛すべき女性ではありませんか！ 彼女に手を差しだそうという考えが頭をよぎった時点で、お父さんの若々しい心と壮健なる気力は証明されています。この思いつき、とっさに出てきたこの提案をよく考えぬき、検討してみましょう。その結果、お父さんが幸せになるとわかれば、ぼくはますます幸せになるでしょう。ぼくの将来のために配慮してくださった分、お父さん自身もこれほど素晴らしい報いをお受けになることを、ぼくはますます嬉しく思うでしょう。今、ようやく勇気を出して、信頼し、心を開き、ぼくはお父さんをあの美しい女性のもとに案内しましょう。お父さんはぼくの感情に同意してくださるでしょう。なぜならお父さん自身も感じていらっしゃるからです。お父さんは息子の幸福の邪魔をなさることはないでしょう。なぜならお父さんもご自身の幸福に向かっていらっしゃるからです。」

こんな風に息子は次々と言葉をならべ、躊躇の言葉をはさもうとする父親に隙を与えず、急いで美しい未亡人のもとに彼を連れていった。二人が出かけると、彼女は立派な設備の大きな邸宅で、大人数ではないがえり抜きの仲間たちに囲まれ、朗らかに談笑しているところであった。彼女はどんな男も逃さない女性の一人であった。驚くべき巧みさで、彼女は少佐をこの日の夕べの主人公に仕立てあげた。他の仲間は彼女の家族で、少佐だ

けが客人であるかのようにであった。少佐の状況をかなり知っていたながら、彼女はまるですべてを今初めて知ろうとするかのように質問した。そうすると集まった人々もみな、この新参者に何らかの関心を示さないわけにはいかなかった。ある男は彼の兄を、別の男は彼の所有地を、そしてまた別の男は他の何かを知っていたということになり、少佐は自分がいつも弾む会話の中心にいるように感じた。しかも彼は美しい未亡人のすぐ隣に座っていた。彼女の目は彼をとらえ、彼女の微笑は彼に向けられた。要するに、彼は自分がなぜここに来たのかその理由をほとんど忘れてしまうほど、すっかりくつろいでしまっていた。しかも彼女は、彼の息子について、この若い男が必死で会話に加わっていたにもかかわらず、一言も口にしなかった。息子は彼女にとって、他の全員と同様に、今日はただ父親の引きたて役としてのみ存在しているようだった¹⁰⁾。

人々はいくつもの部屋を歩きまわり、偶然に一緒になっては会話を始めた。中尉は美しい未亡人に歩みより、尋ねた、「父をどう思われますか？」微笑みながら彼女は返事をした、「あなたはお父様を見ならうのがよろしいのではと思います。ご覧なさい、なんて素敵に着こなしてしょう！ お召しものもふるまいも息子さんよりずっと立派ではないかしら。」このように彼女は息子を貶めながら父親を大げさに褒めそやし、若い男の心に満足と嫉妬の入り混じった感情を引きおこした。

しばらくして息子は父と顔を合わせると、彼女の言葉をくり返し、すべてをこと細かに伝えた。父親は未亡人に対してますます親しみを込めてふるまい、彼女のほうでも、すでにますます熱のこもった、うちとけた調子で彼に応じていた。つまり別れ際には他のすべての人々と同様、少佐はすっかり彼女に引きつけられ、彼女のとりまきの一員になっていたわけである。

10) 2稿ではこの後、2段落追加され、美しい未亡人が「ベネロペのためらいを思わせるような作品」と称される見事な紙入れを製作しているエピソードが挿入される。FA10, S. 451f. 追加されたエピソードの果たす役割については、拙稿「若返りと老いの物語」86-88ページを参照。

激しく降りだした雨のせいで、人々は来たときと同じように帰宅することができなかった。何台かの豪華な馬車が玄関口まで乗り入れ、徒歩で来た人たちが分かれて乗りこんだ。中尉だけはすでに座る場所が窮屈だと口実をつけ、父を先に帰してその場に残った。

少佐は自分の部屋に戻ると、ある状態から正反対の状態に置かれたときに生じるように自分自身がおぼつかなく思われ、一種のめまいのようなものを感じた。舟から降りたとき、大地が揺れているように思われたり、急に暗闇に足を踏み入れたとき、目にまだちらちらと光が見えたりするものである。ちょうどそんな風に、少佐にはまだ美しい女性が自分のまわりにいるような気がした。彼は彼女をまだ見ていたい、声を聞いていたいと欲し、もう一度会いたい、もう一度声を聞きたいと願った。そしてしばらく考えこんだあと、彼は息子を許し、これほど多くの長所をもつ女性を得る権利を主張できる息子を幸せ者だと思った。

このような少佐の物思いを破ったのは息子だった。彼は激しく興奮してドアから駆けこんでくると、父親を胸に抱き、叫んだ、「ぼくは世界一の幸せ者です！」そのようなことをなお二、三叫んだあと、ようやく二人のあいだで状況説明が始まった。父親は、美しい女性が自分との会話のなかでほんの一言も息子について言及しなかったことを伝えた。「それがまさに彼女の繊細で寡黙な、半ば黙し半ばほのめかすやり方なのです。そのため、自分の希望が満たされると確信しつつも、いつも完全に疑念をはらうことができないのです。こんな風に彼女はこれまでもぼくに接してきました。しかしお父さん、お父さんが来てくださったおかげで、奇跡が起こったのです。進んで告白しますが、ぼくは彼女をもう少しながめていたくてあの場に残りました。彼女は灯りのついた部屋を行ったり来たりしていました。よく知っていますが、それが彼女の習慣なのです。人々が去っても、灯りを消してはいけません。彼女の呪文に引き寄せられた霊たちが解放されると、彼女は一人で魔法の広間を歩きまわります。戻るための盾にしたぼくの口実を彼女は認めてくれました。彼女は優雅に、しかし、た

わいもないことを話しました。ぼくたちは開いたドアを通り、並んだ部屋をひとつひとつ歩きました。ぼくたちは一番奥の、くもったランプひとつだけに照らされた小部屋にすでに何度目か入って行きました。シャンデリアの下で動く彼女も美しいのですが、柔らかなランプの灯りに照らされた彼女は、さらにずっと、それ以上の美しさでした。その小部屋に二人は再びたどりつき、ひき返そうとして一瞬、立ちどまりました。どうしてそんな大胆なことを思いつき、やっけてのけることができたのか、ぼくにもわかりませんが、どうでもよい会話の途中でぼくは突然彼女の手を握り、そのしなやかな手に口づけし、それをぼくの胸に押しつけたのです。彼女は手を引きはなしませんでした。『天使のような方!』とぼくは叫びました、『これ以上、私にお心を隠さないでください。この美しい胸のなかに、あなたの目の前にいる幸福な男への愛情が宿っているのなら、どうかこれ以上隠さず、明かしてください、うちあけてください! それにふさわしい最高のタイミングです。私を追いはらうか、そうでなければ私をあなたの腕に受け入れてください!』

自分が何を話したのか、どんな風にふるまったのか、よく覚えていません。彼女は離れず、抗わず、応えませんでした。ぼくは思いきって彼女を腕に抱き、あなたを自分のものだと思ってよいかと尋ねました。ぼくは激しく彼女に口づけし、彼女はぼくを押しつけました。『ええ、でも、そうよ!』そんなことを口ごもり、彼女は混乱しているようでした。ぼくは離れて、叫びました、『父に来てもらい、ぼくの代わりに話をしてもらいます。』『お父様にはお話しにならないでください!』彼女はそう返すと、何歩か私のあとを追ってきました。『お帰りください、このことは忘れてください!』

少佐がどう思ったか、私たちは細々述べたてるつもりはない。彼は息子に言った、「さて、おまえはこれからどうするのがよいと思っているんだい? 準備もなしに事はかなりうまく滑りだしたようだが、ここからはもう少し形式的に着手できる。明日、私が出かけていって、おまえの代わり

に正式に求婚するのが非常に穏当なのではないだろうか。」「お父さん、お願いです！」と息子は叫んだ。「そんなことをしたら、すべて台無しでしょう。あの態度も調子も、形式的なものをもちこんで邪魔をしたり調子を狂わせたりするべきではありません。一言もおっしゃらなくても、お父さんの存在がこの結びつきを促進してくれる、それで十分です。ぼくの幸せはお父さんのおかげなのです！ お父さんに対するぼくの愛しい女性の尊敬の念が、あらゆる疑念を克服したのです。お父さんがお膳だてしてくれなければ、息子は決してこれほど幸せな瞬間を見いだすことはなかったでしょう。」

このようなことを二人は夜遅くまで話しあい、それぞれの計画についてお互いに意見を一致させた。少佐はただ形式的な理由から、別れの挨拶のための訪問を行ない、それからヒラーリエとの結婚に向けて進んでいくことになり、息子のほうは自分の結婚をできるだけ促進し、早めるように努めることになったのである。

「ヒラーリエの追伸」¹¹⁾

ここで中断する理由は、私が今はこれ以上書くことができないからですが、同時にあなたの胸にとげを残すためでもあります。あなたが読まれたすべてから判断して、この女性たちがどれほど奇妙な状況に置かれているに違いないか、さあ、ご自身でお答えになってみてください。近づきになる結びつきをそれぞれがどれほど期待しているように見えたとしても、これまで彼女たちは関係をもたず、お互いを知らずにいました。しかし今、彼女たちは一緒にいます。しかも二人きりで、男性の供も連れずに世界をさまよっているのです。何があったのでしょうか、これからどうなるので

11) 2稿では「ヒラーリエからヴィルヘルムへ」同様に「ヒラーリエの追伸」も削除され、直接、第2巻第4章、第5章でノヴェレ「50歳の男」が続く。FA10, S. 455–494.

しょうか？ 彼女たちもまた今では諦念の人々か！ そう悲しく独りつぶやけば、あなたはそれで切り抜けられますわ。それはまったく正しいのです。でも、彼女たちは期待する人々でもあるのではないかしら？ たとえ知っているとしても、私はそれをうちあけることはできません。

あなたが遍歴の途上でこの愛すべき二人組とお会いになれるよう道をお示しするため、私は風変わりなやり方を選びました。地図の小さな切り抜きを同封いたしますわ。これを大きい地図の上ののせると、そこに記された方位磁針の矢印が、探す価値のある方々の向かう地方を示します。この謎を解くことはそれほど難しくありません。どうぞあなたもときどき私たちに同じように、地図でいたずらをしむけてくだされば嬉しいのですけれど。そうすれば、どちらに思いをめぐらせればよいかわかりますもの。そして、もしその針がいつか私たちに引き寄せられるなら、どれほど喜ばしいことでしょう。迷わずに楽しめますよう、幸運をお祈りいたします。

追伸なしには手紙を出すことができないと、女性はよく陰口をたたかれるものです。それがどんな結論をもたらすにせよ、これがすでに二仲であることは否定できません。そしてもっとも重要なことは、実はここで話題になることなのです。同封した紙片に記されたこの矢柄は、ヒラーリエが自分で引き、華奢な羽ペンで装飾しました。しかし尖った矢印をつけ足したのは美しい未亡人です。矢で傷つかないように、それどころかあなたに命中しないようご注意ください。どこであっても初対面の際に、すぐにあなたがこの紙片を呈示することを申しあわせておきましょう。そうすれば、あなたはそれだけ早く親しみを込めて二人に歓迎されることでしょう。

中間のことは¹²⁾

ひよっとすると今後は亀裂のようなものが感じられたり、全体的にもと

12) 2稿では削除。ただし2稿では別の箇所(第2巻第7章の終わり)に別

ころどころで目についたり、そうしたことを避けることはできないと私は自ら断言しましょう。しかし、だからといって読者のみなさんの楽しみが台無しになるとは恐れていません。配慮と勇気をふるって編集作業を行っている現在も、私たちはあらゆる不都合に出くわしますが、この不都合がこの小著の出版を20年も長引かせてきたのです。しかしこの歳月をもつてしても、事態はまったく改善されませんでした。私たちはあいかわらずそれなりの障害を抱えているのであり、そこここで停滞の危機にさらされているのです。というのも私たちは非常に雑多な書類のなかから、思索する教養ある人々を喜ばせ、人生の折々の段階で彼らを元気づけ促進させることができるような、もっとも価値のあるもっとも重要なものを探し出すという難題を解決しなければならないのです。ところが今、私たちの目の前にあるのは、それなりに詳細に記されたいくつもの日記帳であり、さしさわりなくお伝えできる場所もあれば、内容が重要でないもの、逆に重大すぎるために挿入するにはふさわしくない箇所もあるのです。

さらに現実社会のために書かれたノートも欠けていません。統計や技術、その他の実際の内容物です。こうした資料を不適切なものとして排除することは困難です。人生と愛着、認識と情熱は不思議なくらい結びつき、互いに緊密に結合して進展していくものなのですから。

次に草稿類です。よき意図をもって立派な目標のために書かれてはいますが、徹底的に首尾一貫しているというわけではなく、完全に承認するわけにはいきませんし、これほど前進した新しい時代に読まれうる、効果があるとみなすことも難しいのです。

同様に私たちは関連性のない小さな逸話にも出くわします。分類するのが難しいのですが、じっくり吟味すると、まったく無害とは言えないものも混じっています。ときには比較的完成した物語にも出会います。そのなかにはすでに知られているものもあり、どうしてもここに場所を欲し、解決と決着を要求しているのです。詩もあります。しかし乱されやすく、ゆ

内容の「中間のことば」が挿入される。FA10, S. 515.

がめられてしまう本来の気分を大切にしつつ、それらをどこに挿入すればよいのかはいつも容易に決定できるわけではありません。そこで私たちが何年も前からしばしばそうだったように、この仕事においてまたしても行きづまってしまわないために残された道は、所有しているものを引きわたし、保存してきたものを伝達する以外にはありません。こうして私たちは、本当は仕上げるのが望まれていたいくつかの章をただとり急ぎの姿でお示しするだけです。読者のみなさんには、ここには何かが不足していると感じるだけでなく、自分は欠けているものについてより詳しく心得ているのだと感じていただきたいのです。一部には対象の性質にしたがって、また一部にはこれからの諸事情に合わせて、今は完全な姿に完成していませんともあらゆる例証で補強しながらこれから読者の前に登場しうるものを、自分自身で完成させるのだとお考えいただきたいのです。

[第 11 章終わり]

今回の試訳について

今回訳出したのは、初稿全 18 章の第 10 章と第 11 章で、2 稿の第 2 巻第 1 章、第 2 章、第 3 章に対応している。内容的にはヴィルヘルム父子が教育州に到着し、ヴィルヘルムがこの施設に息子フェーリクスを預け、出発するまでと、ヘルジーリエの手紙に同封されたノヴェレ「50 歳の男」の導入部をヴィルヘルムが読む部分に分けることができる。これは章分けとは一致しておらず、教育州の描写は第 10 章から第 11 章前半まで続き、第 11 章の後半からヘルジーリエの手紙とそこに同封された「50 歳の男」、さらに章末に作者ゲーテに限りなく近い編集者による「中間の言葉」が置かれている。一方、2 稿では内容にそくした章分けに改編されており、第 2 巻第 1 章と第 2 章が教育州、第 3 章が「50 歳の男」となる。さらに 2 稿では第 4 章、第 5 章まで「50 歳の男」が続く。教育州の描写には 2 つの稿のあいだに異同はほとんどないが、「50 歳の男」は初稿ではまだ導入部しかない上に、改稿の過程で導入の仕方に大きな変更が生じている。また初稿の「中間の言葉」は 2 稿では削除され、別の箇所（第 2 巻第 7 章）に新たな内容の「中間の言葉」が置かれている。

教育州の描写に大きな刺激を与えたとされるのは、フィリップ・エマニュエル・フェレンベルク（1771–1844 年）が 1808 年、ベルン近郊ホーフヴィルに設立した「上流階級の子息のための教育施設」である。カール・アウグストがカロリーネ・ヤーゲマンとのあいだに生まれた息子たちをこの施設に預ることになった関係で、1817 年から 1820 年にかけて、ゲーテもホーフヴィルの教育施設を詳しく知ることとなり、フェレンベルクと手紙のやりとりも行なっている¹³⁾。正確には確定できないが、執筆はこの時期と考えてよいだろう。

13) Anneliese Klingenberg: *Goethes Roman „Wilhelm Meisters Wanderjahre oder die Entsagenden“*. Quellen und Komposition. Berlin und Weimar 1972, S. 57.

唯一の変更された内容は、注6に記したとおり、ヴィルヘルムの再訪の時期である。初稿では一年後に約束され、実際にヴィルヘルムは一年後に教育州に戻ってくるが、2稿では再訪の時期はあやふやなまま出発し、父子の再会までに数年の年月が経過することになる。この数年のあいだにフェーリクスは「正真正銘の青年に成長」(FA 10, S. 517)し、ヴィルヘルムは外科医としての専門教育を終えることになる。

「50歳の男」は、初稿ではヘルジーリエからヴィルヘルムに宛てた手紙のなかに同封されているが、2稿では小説の編集者である語り手の短い前置きにつき、初稿には欠けていた後半部分まで物語はひと続きに挿入される。1820年11月の構想段階ですでに物語の大枠は決定されていたが、編集者の言葉にあるとおり(「私たちは最初、次の物語をいくつかの部分に分けて紹介するつもりでした」FA 10, S. 433)、ゲーテは当初から「50歳の男」を分割して小説に挿入するつもりであった。2稿の改作過程でも、この計画はかなり最後まで残っていたと考えられる¹⁴⁾。

ヘルジーリエの手紙は、ヴィルヘルムがくるみ色の少女を発見したことを読者に伝えるという重要な役割も担っている。ここでヘルジーリエは、ヴィルヘルムのそっけない報告ではレナルドーの情熱は鎮まることができないと非難しており、実際にレナルドーは自分自身でくるみ色の少女を探しまわったことが後に判明する(第17章)。一方、ヘルジーリエの手紙が削除された2稿では、第2巻第6章でヴィルヘルムがレナルドーに宛てた手紙でくるみ色の少女の発見を直接報告する。同巻第7章ではレナルドーがヴィルヘルムに宛てて、その報告だけで自分は満足し、遍歴組合での活動に邁進することを誓う。改作により、レナルドーは情熱的な男から諦念者に大きくシフトしている。

14) 序文の草稿が1828年12月22日のヴァイマル劇場プログラムの裏に残されており、この時期に現在の形に確定した可能性が高い。Goethes Werke. Hg. im Auftrag der Großherzogin Sophie von Sachsen. 143 Bde. Weimar 1887-1919 [=WA], Bd. 29 (I. 25. 2), S. XV (Einzelhandschrift 62).

ヘルジーリエの役割も2つの稿のあいだで大きな相違がある。初稿のヘルジーリエは諦念者としてふるまうヴィルヘルムに批判的な態度をとり、追伸にあるとおり、ヴィルヘルムと「50歳の男」の魅力的な二人の女性との出会いをお膳だてし、ヴィルヘルムの諦念を試そうとする。初稿のヘルジーリエは諦念できない情熱的な人間の側に立っているが、あくまでも部外者の立場からヴィルヘルムを非難する。一方で2稿では、ヘルジーリエは青年フェーリクスから熱烈な情熱を捧げられながら、彼女自身はヴィルヘルムにあこがれを抱き、父と息子のあいだで揺れる女性となる。初稿では、諦念できない情熱を扱うノヴェレの世界と諦念者たちの活動する杵物語の世界は完全に切り離されているが、2稿では、フェーリクスとヘルジーリエは諦念しない登場人物として諦念者たちの世界に登場する。ヘルジーリエと父息子の三角関係が、サイドストーリーとなって諦念の人々の杵物語に並走するのである。注10に記した新しいエピソードも、この三角関係の伏線として追加されている。

第11章の最後で語り手が突然、小説の編集者として正面から登場し、「中間の言葉」を挿入する。2稿では、もっと早い段階で編集者としての語り手がたびたび姿を現す（第1巻第10章のマカーリエの館で、語り手が数学者の朗読を省略する弁明を述べるくだりなど）。しかも、その内容が小説の実際の成立事情と重なるため、この言葉はほとんど作者ゲーテの言葉として読むこともできる。20年長引いた出版とあるが、ゲーテが初めて『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』（1795-96年）の続編計画をシラーに伝えたのは1796年7月12日の書簡（FA 31, S. 210）であり、その後、数年のうちに作成されたと推定できる最初の構想メモが残されている（Vgl. FA 10, S. 839ff.）。小説の素材とされる日記帳にはヴィルヘルムとレナルドーの日記が含まれる。旅人ヴィルヘルムがナターリエのために日記をつけ、送り届けていることは読者にも知られている（第1章の「ヴィルヘルムからナターリエへ」）。一方、レナルドーの日記のほうは、初稿ではその存在がほのめかされるだけで（第17章）、2稿で初めて具体

的に紹介される。もっともゲーテ自身はすでに初稿出版前の1821年1月にレナルドーの日記のシューマを作成しており (Vgl. FA 10, S. 825f.), 「中間の言葉」にこの日記も含意されていることは間違いない。「現実社会のために書かれたノート」は、レナルドーの日記に盛りこまれるスイス紡績業に関する記述部分を取っていると考えられる。これは1810年のハインリヒ・マイヤーの報告書に基づいており、当初よりゲーテはマイヤーの資料を『遍歴時代』に挿入する計画であった (Vgl. FA 10, S. 878ff.)。逸話や物語とは『遍歴時代』に挿入されたノヴェレを指すのであろうが、すでに知られているものとは『婦人年鑑』に既出のもの、そのうち解決と決着が必要なものは前半までしか公表されていない「くるみ色の少女」と「50歳の男」と考えることができる。詩とは初稿の冒頭に置かれた複数の詩のことと思われるが、これらは1818年から1820年ないし1821年にかけて成立している。『遍歴時代』との接点が不明のものも多く、「中間の言葉」にあるように、とり急ぎ読者に引きわたされたものの、2稿ではすべて削除され、決定版ゲーテ全集ではそれぞれ別の居場所を獲得することになる。このように、小説の架空の編集者は、計画から20年が経ってもなお完成させることができず、断片的な「第1部」として出版することになった初稿『遍歴時代』に対する作者ゲーテの弁明を代弁している。

最後に2稿の「中間の言葉」について補足しておく。「ここで私たちは読者に休止を、しかも数年にわたる中休みを通達しなければなりません。それゆえに、もし印刷上の都合がついたならば、喜んでこの箇所まで巻を閉じたことでしょう」(FA 10, S. 515)で始まる2稿の「中間の言葉」は、ヴィルヘルムのミニョンの故郷訪問と2度目の教育州訪問とのあいだに置かれており、そのあいだに数年の年月が経過したことを読者に報告している。2稿への改作にあたり、この数年が登場人物たちの成長期間として追加されたことはすでに上に述べた。さらに、本来ならばこの箇所でも小説の巻分けを行ないたかったとも告白されている。実は2稿は1827年6月に2部構成でいったんの完成をみており、その際、2つの巻の分け目はこ

の箇所であった。しかしその後、印刷の都合上、3部構成に改編する必要が生じ、ゲーテにとっては不本意な場所での巻分けを強いられたのである¹⁵⁾。2稿の「中間の言葉」はこの経緯を弁明する内容になっており、やはり作者ゲーテの声が重なる。成立は改作の最終段階と考えられる¹⁶⁾。

15) 決定版ゲーテ全集の構成の都合で、『修業時代』と『遍歴時代』はそれぞれ3巻に分けて印刷されることが決定する。2部構成から3部構成への改編過程で2つのアフォリズム集が追加されたことは有名だが、それ以上に、この過程でマカーリエの扱いが大きく変更されるなど重要な改作作業が行われることになる。

16) この「中間の言葉」には不採用原稿が残されており、その一部には1828年12月30日の日付けがある。Ebd., S. XVIII (Einzelhandschrift 99).